多賀城市文化財調査報告書第48集

留ケ谷遺跡

—第1・3次調査報告書—

平成10年3月

多賀城市教育委員会

留　ヶ　谷　遺　跡

―第1・3次調査報告書―

平成10年３月

多賀城市教育委員会

上　土塁と溝(第1次調査)
下　焼土土壙(第1次調査)

第２図差し替え

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
野田館跡	矢作ヶ館跡	元舟場遺跡	丸山囲古墳群	多賀城廃寺跡	高崎遺跡	東田中窪前遺跡	稲荷殿古墳	樹井館跡	志引遺跡	留ヶ谷遺跡		多賀城市
32	30	31	29	28	18	17	16	15	14	13	12	
内館館跡	大日北遺跡	六貫田遺跡	山王遺跡千刈田地区	山王遺跡	市川橋遺跡	多賀城跡	西沢遺跡	法性院遺跡	高原遺跡	館前遺跡	小沢原遺跡	
34	33	19	20	22	21	23	25	27	26	24		
十三本塚遺跡	加瀬貝塚	加瀬沼遺跡群	松崎C遺跡	松崎B遺跡	松崎A遺跡	稲荷崎B遺跡	台城C遺跡	台城B遺跡	台城遺跡	稲荷崎遺跡		利府町
		43	42		41	40	39	38	37	36	35	
		塩竈古館	塩竈神社境内遺跡		北窪遺跡	天形遺跡	窪遺跡	洞女喜遺跡	天神台遺跡	山屋敷遺跡	十三塚遺跡	
					塩竈市							

序　　文

留ケ谷遺跡は、土塁・空堀が良好に残存する市内では数少ない遺跡であります。昭和60年度に実施した第１次調査ではそれらの構造を明らかにし、この遺跡が中世の武士階級の館跡であることを広く印象づけました。また、翌年に実施した第２次調査では、中世の館の一部が近世には屋敷として利用されていたことが判明し、本市の近世史に貴重な１ページを書き加えました。

今回の調査は、市道の改良工事に先立って実施したものであり、本遺跡においては３回目の調査であります。狭い範囲を対象としたものではありましたが、平安時代の土壙や溝を発見するなど様々な成果を挙げることができました。詳細については本文に譲るとして、これまで本遺跡の中であまり明らかではなかった古代の情報を得るという大きな成果を収めました。本遺跡に関するデーターがまた一つ蓄積された訳であり、本市の文化財に携わる者として大変喜ばしく思う次第であります。

なお、本書には第１次調査の成果もあわせて収録致しました。同調査については、諸般の事情から正式な報告書を作成することがかなわず今日に至ったものでありますが、この度関係各位の御理解を得て、このような形をとることができました。多くの方々に本書が活用されることを切に望むものであります。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、ご指導・ご協力を頂戴した関係者および関係諸機関に対し、衷心より御礼申し上げます。

平成10年３月

多賀城市教育委員会

教育長　櫻　井　茂　男

例　　言

1　本書は、昭和60年度に実施した留ケ谷遺跡第１次調査と、平成９年度に実施した同遺跡第３次調査の成果をまとめたものである。

2　遺構番号は第１次調査からの一連番号である。

3　本書で使用した遺構の分類記号は次のとおりである。

　　ＳＤ：溝跡　　ＳＫ：土壙　　ＳＸ：その他の遺構

4　調査区の実測基準線は「平面直角座標系Ｘ」を使用して設定している。

5　挿図中の高さは標高値を示している。

6　瓦については宮城県多賀城跡調査研究所の分類に従った（宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡　政庁跡本文編』1982）。

7　土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1973）を参照した。

8　本書の作成にあたり、入間田宣夫氏（東北大学教授）には中世の歴史的環境について、丹羽茂氏・柳沢和明氏（宮城県多賀城跡調査研究所）には古代の遺物について御教示頂いた。

9　本書の執筆は次のとおりである。

　　Ⅰ－高橋圭藏、Ⅱ１～７、９－千葉孝弥、Ⅱ８－山川純一、Ⅲ１、３－車田　敦、Ⅲ２－高橋圭藏
　　Ⅲ４、５－高橋圭藏、車田　敦、三浦幸子、Ⅳ－千葉孝弥

編集は高橋が行った。

10　調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

序文
例言
目次
Ⅰ　遺跡の位置と環境……1
　1　位置と地理的環境……1
　2　歴史的環境……1
Ⅱ　第１次調査……4
　1　調査要項……4
　2　調査に至る経緯……4
　3　調査方法と経過……6
　4　層序……11
　5　発見した遺構と遺物……12
　6　遺構の変遷と年代……26
　7　焼土土壙について……28
　8　出土遺物について……28
　9　まとめ……32
Ⅲ　第３次調査……33
　1　調査要項……33
　2　調査に至る経緯……33
　3　調査方法と経過……33
　4　発見した遺構と遺物……35
　5　遺構の年代と分布……40
　6　まとめ……41
Ⅳ　考察……42

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1.　位置と地理的環境

多賀城市は、仙台市の中心部から北東約10㎞の地点にあり、北側で利府町、東側で塩竈市・七ケ浜町、西・南側で仙台市とそれぞれ接している。本遺跡は市中央部の留ケ谷地区にある。

多賀城市の東部は海岸部をのぞくほぼ全体が標高５～12ｍの丘陵となっている。この丘陵は、地理的にいうと陸前丘陵の一つである松島丘陵と呼ばれているものである。その西端部は一般に高崎丘陵と呼ばれ、本遺跡はその北東端部に立地している。北、西、南の三方は大小の谷が入り込む複雑な地形であり、東側のみがゆるやかに沖積地に移行している。遺跡の範囲は東西約150ｍ、南北約300ｍである。

第１図　多賀城市の位置

2.　歴史的環境

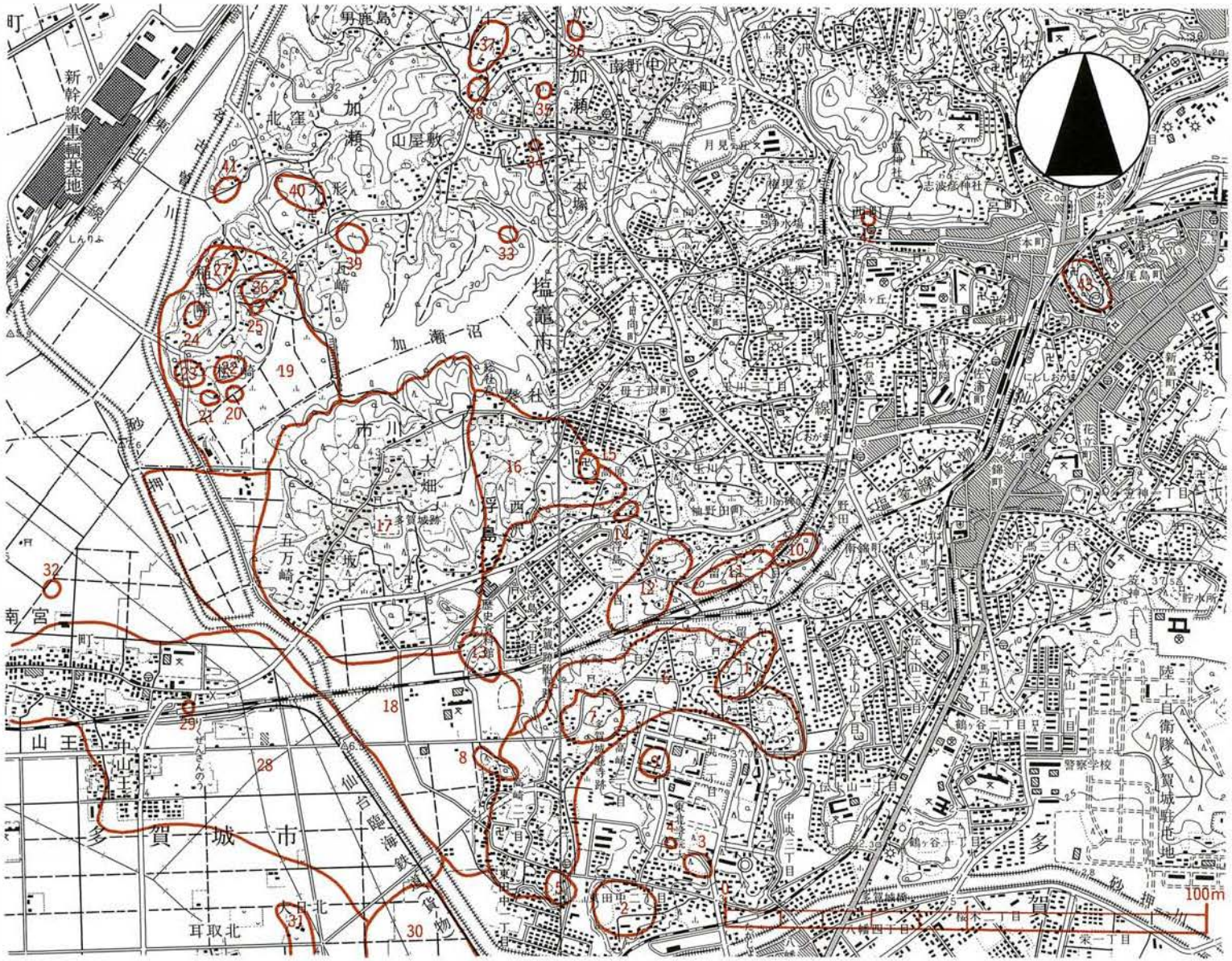
本遺跡が所在する高崎丘陵には、旧石器時代から江戸時代に至る多くの遺跡が分布している。南西1.3㎞の丘陵南端部には約10万年前と推定される旧石器時代の志引遺跡がある。古墳時代の遺跡としては西1.3㎞の丘陵西端部に中期頃とされている丸山囲古墳群、南西0.9㎞の地点には後期の稲荷殿古墳がある。西0.8㎞の地点にある多賀城廃寺の調査では前期の竪穴住居が発見されている。奈良・平安時代の遺跡としては、多賀城付属寺院である多賀城廃寺を中心とした広い範囲が高崎遺跡となっている。高崎遺跡は一般に集落跡として知られているが、官衙風の掘立柱建物や工房なども発見されており、地点ごとに様々な性格を持っていることが推定される。北0.5㎞の地点にある野田館跡、小沢原遺跡もこの時期の集落跡と考えられている。中世の遺跡としては南0.9㎞の地点に桜井館跡、北0.5㎞の地点に矢作ケ館跡と野田館跡がある。志引遺跡やその西側の東田中窪前遺跡も館跡と考えられている。近世の遺跡としては高崎遺跡弥勒地区において屋敷跡を発見している。また、本遺跡の東側に隣接している向泉院には仙台藩の御用米の運搬などのために御舟入堀を切り拓いた和田織部房長の側室の墓がある。[(1)] この他、埋蔵文化財包蔵地からは外れるが、本遺跡南西部の旭ケ岡地区に「御屋敷」という字名があり、かつて開墾した際に焼土、灰、土器類が出土したという。[(2)]

このように、高崎丘陵には各時代にわたる遺跡があり、しかもその多くが複合遺跡であるなど、良好な生活環境にあったことが推定される。

---

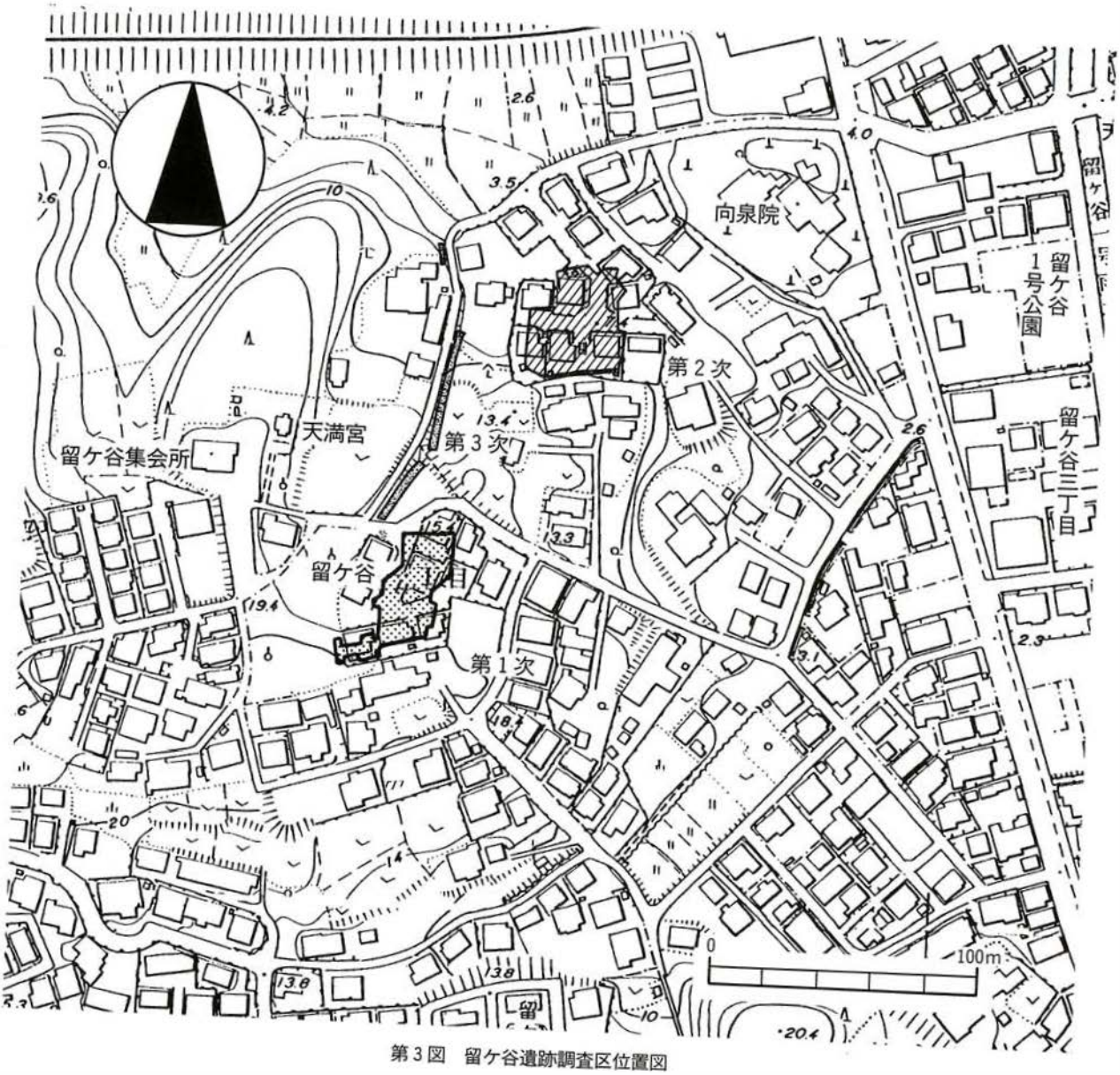
(1)　和田氏の家臣の多くがこの寺を菩提寺としていることなどから本遺跡の周辺一帯に和田氏及びその家臣の屋敷があったとする説がある（寺嶋修二「貞山運河、七北田川の付替、御舟曳堀、蒲生御蔵前、鶴巻御蔵、苦竹御蔵の歴史」『高砂の歴史』1984）。しかし、この見解については根拠となる史料が提示されていないため検証することができず、また和田氏が留ケ谷周辺を知行したということも仙台藩の記録の中に見出すことができない。

(2)　出土品については現在所在不明。『多賀城町誌』（1967）では、確証はないとしながらも留ケ谷内膳居館跡か、としている。留ケ谷内膳については詳細は不明であるが宮城郡の小領主と考えられている（佐々木慶市『水沢市史』２　中世　1976）。



第2図　遺跡の位置

	多賀城市																							
1	留ケ谷遺跡	13	館前遺跡	25	台城遺跡	37	天神台遺跡	49																
2	志引遺跡	14	高原遺跡	26	台城B遺跡	38	洞女喜遺跡	50																
3	桜井館跡	15	法性院遺跡	27	台城C遺跡	39	窪遺跡	51																
4	稲荷殿古墳	16	西沢遺跡	28	稲荷崎B遺跡	40	天形遺跡	52																
5	東田中窪前遺跡	17	多賀城跡	29	松崎A遺跡	41	北窪遺跡	53																
6	高崎遺跡	18	市川橋遺跡	30	松崎B遺跡		塩竈市																	
7	多賀城廃寺	19	山王遺跡	31	松崎C遺跡	42	塩竈神社境内遺跡																	
8	丸山囲古墳群	20	山王遺跡千刈田地区	32	加瀬遺跡群	43	塩竈古館																	
9	元舟場遺跡	21	六貫田遺跡	33	加瀬貝塚																			
10	矢作ケ館跡	22	大日北遺跡	34	十三本塚遺跡																			
11	野田館跡	23	内館館跡																					



第3図　留ケ谷遺跡調査区位置図

II　第 1 次調査

1.　調査要項

遺　跡　名　　留ケ谷遺跡（宮城県遺跡登載番号18047）
所　在　地　　宮城県多賀城市留ケ谷一丁目330番 1
調 査 面 積　　1,300㎡（対象面積2,380㎡）
調 査 期 間　　昭和60年 4 月20日～ 7 月 3 日
調 査 主 体　　多賀城市教育委員会　　教育長　玉蟲　誼
調 査 担 当　　多賀城市教育委員会　　社会教育課文化財保護係
調　査　員　　高倉敏明　滝口　卓　石川俊英　石本　敬　千葉孝弥　相沢清利
調 査 協 力　　留ケ谷地区集会所
調査参加者　　赤間かつ子　阿部敏子　阿部トシ子　阿部美智子　阿部美津子　猪俣敏子　浦山一馬
　　遠藤一代　小野玉乃　黒崎庸治　後藤はつみ　桜井栄子　桜井三千夫　佐々木四郎
　　佐藤節子　佐藤たま子　佐藤東三　下道博信　菅原絹代　鈴木　劭　高野敏子　千葉享一
　　角田静子　鶴巻まき子　早坂えみ子　渡辺園恵　渡辺ゆき子
　　（遺物整理）滝口裕子　我妻悦子　柏倉霜代　須藤美智子　熊谷純子　黒田啓子
分布調査　　調査期日　　昭和59年 9 月19日
　　調 査 員　　高倉敏明　　滝口　卓　　石本　敬
試掘調査　　調査期間　　昭和59年11月 6 日～11月17日
　　調査面積　　80㎡
　　調 査 員　　石本　敬　　千葉孝弥

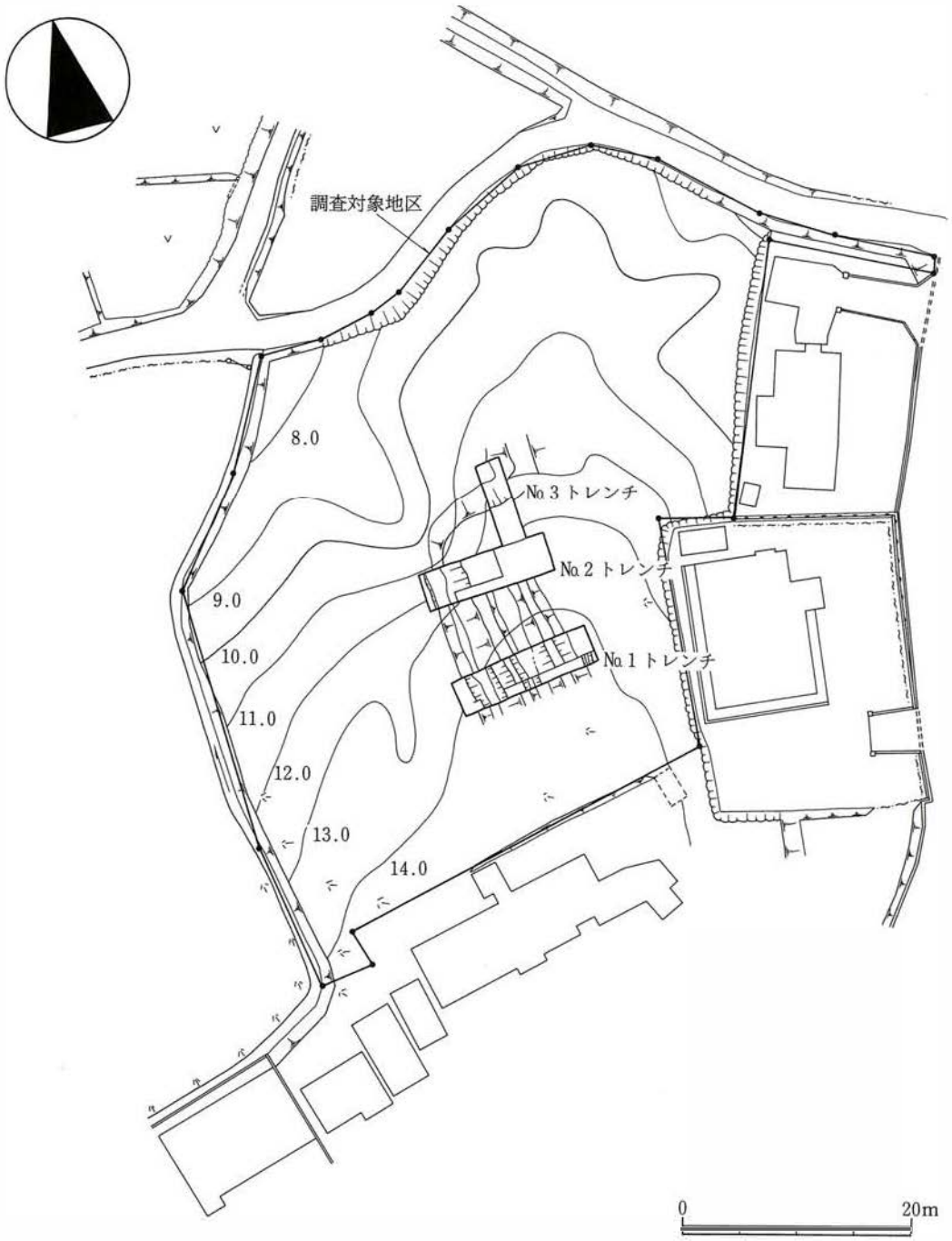
2.　調査に至る経緯

本調査は、株式会社瀬戸建業（多賀城市留ケ谷三丁目 6 ― 3 ）による当該地の宅地造成計画に係る事前調査である。

この件について、昭和59年 7 月 4 日付で都市計画課長から社会教育課長にあてて開発行為に係る事前協議について照会があった。これに対し、社会教育課では、当該地が埋蔵文化財包蔵地である高崎遺跡に含まれることから、提出された計画書にもとづく土木工事に当たっては事前に当課との協議が必要である旨指導するよう回答した。同年 9 月12日、株式会社瀬戸建業から教育委員会にあて、開発計画のため当該地の埋蔵文化財の有無について協議の依頼があった。これを受けて、社会教育課では 9 月19日に開発計画予定地内の分布調査を実施し、 2 条の土塁状の高まりとそれに並行する空堀状の落ち込みを発見した。これらは、予定地北側の切り通しにおいても確認することができた。予定地内は雑草が繁茂していることから遺物は採集できなかったが、周辺の畑地からは古代の土器類を数点採集することができた。さらに詳細な資料を得ることを目的として、11月 6 日から17日にかけて試掘調査を実施した。土塁や空堀の状況を見るため、東西トレンチ 2 条、南北トレンチ 1 条を設定し、約80㎡の調査を行った（第 4 図）。この調査において土塁・空堀の構造が把握され、さらにそれらの下層遺構の存在を確認するなどの成果を挙げた。これを

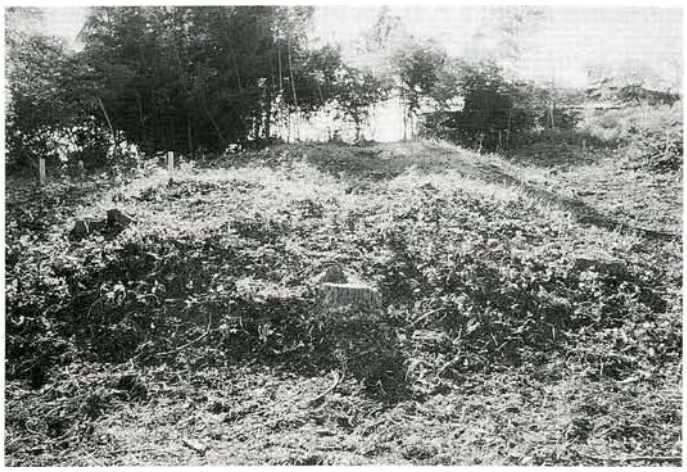
ふまえ、株式会社瀬戸建業に対し、11月28日付で開発の際には発掘調査が必要であることを通知した。その後、調査期間・費用に関する協議を行い、双方の同意が得られたため、4月22日付で地権者鈴木いと(多賀城市留ケ谷一丁目14－1)から正式に発掘調査の依頼書が提出された。発掘調査に係る一切の費用は地権者の負担によるものとし、昭和60年4月30日から6月30日まで約2カ月間の予定で調査を実施することに決定した。

なお、当該地から向泉院にかけての丘陵上には土塁・空堀などの遺構が何箇所かで確認されている。これらは通常館跡に顕著に見られるものであることから、今回の調査を契機としてそれらの存在する東西約



第4図　試掘調査トレンチ配置図

150m、南北約350mの範囲を高崎遺跡から分離して「雷ケ谷館跡」と登録し、その後「雷ケ谷遺跡」と改めた。[3]



第5図　試掘調査前の状況

第6図　試掘調査

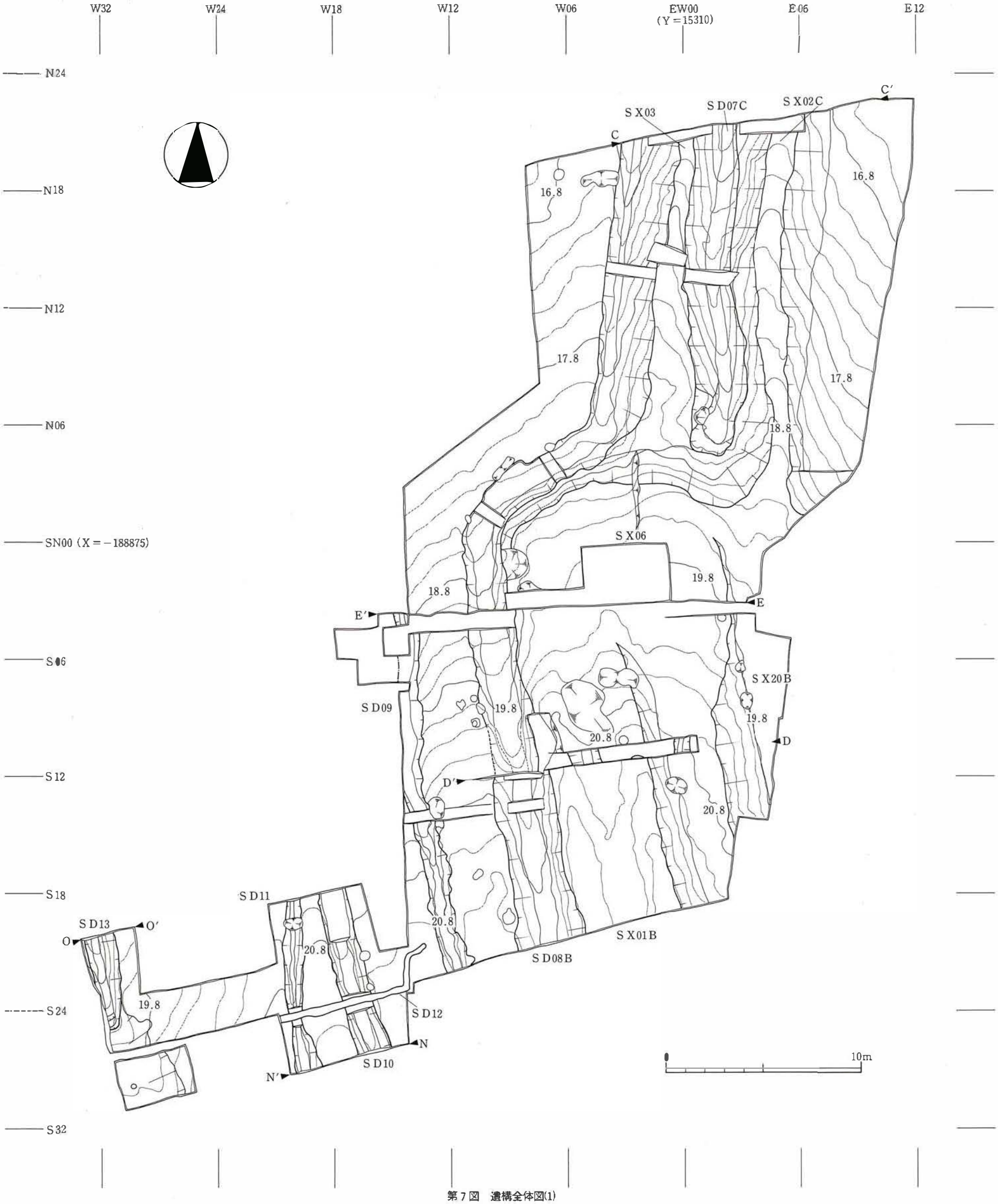
3.　調査方法と経過

(1)　調査方法

対象地区の内、確認調査で土塁・空堀を発見した中央部から東側にかけての北斜面に調査区を設定した。最も低い北東部は遺構の存在が希薄と予想され、土捨て場とした。土塁・空堀の関係を把握するため、試掘調査のNo.1・2トレンチを利用して東西方向のセクションベルトを2箇所設定し、その他は全体的に表土を除去した。その後、遺構がさらに西側にも存在することが予想されたため、南西隅に東西トレンチを設定し（南西拡張区）、遺構の検出を行った。遺物の取り上げについては、便宜的に調査区南半部をA区、北半部の内のさらに南半分をB区、それより北側をC区として行った。

実測図の作成にあたっては、本調査区が傾斜地にもかかわらず同位置で何回かの改修が予想されたため全体に遣り方を設定した。縮尺は平面図・断面図ともに20分の1であり、平面図には20cm間隔の等高線も同時に記入した。なお、遺構の全体像を早急に把握する必要性から、遣り方実測に先行して100分の1の縮尺による平板実測も行った。

(3)　第1次調査区における古代の遺構の存在と、その周辺にも古代の遺物が広く散布することから複合遺跡とした方が適切であるという結論に達し、名称を改めた（「留ケ谷遺跡（第2次調査）」多賀城市文化財調査報告書第14集『年報1　昭和61年度』1987）。


W32
W24
W18
W12
W06
EW00
(Y=15310)
E06
E12
N24
N18
N12
N06
SN00 (X=−188875)
S06
S12
S18
S24
S32
C
C′
S X03
S D07C
S X02C
16.8
16.8
17.8
17.8
18.8
S X06
19.8
18.8
E′
E
S D09
19.8
S X20B
19.8
20.8
D
D′
20.8
S D11
S D13
O′
O
20.8
20.8
S X01B
S D08B
19.8
S D12
N
N′
S D10
10m

第７図　遺構全体図(1)

W32
W24
W18
W12
W06
EW00
(Y=15310)
E06
E12
N24
N18
N12
N06
S N00
S 06
S 12
S 18
S 24
S 32
SD05
SD07A
SX02A
G′
G
H′
H
B
SD07B
SD18
SX02B
B′
F
SX02A
F′
SX14
SD07A
SD19
SD04
SD08A
SD16
A′
A
SX20A
I′
I
SX01A
SX01B
SD08B
10m

第8図　遺構全体図(2)

遺構写真は35ミリのモノクロフィルムとリバーサルフィルムで撮影し、必要に応じて６×７センチ版モノクロフィルムとリバーサルフィルムで撮影した。

(2) 調査経過

今回の調査は４月24日から７月３日まで、実働51.5日間実施した。要した人員はのべ1,045人である。調査経過については以下のとおりである。

4.24　重機による表土除去開始（～25日）
4.26　器材搬入
4.30　作業員が加わり、人力による表土除去開始
5. 1　東西方向のセクションベルト２箇所に設置。南側３分の１の表土除去終了
5. 9　土塁の西側をめぐる南北溝検出（ＳＤ08）
5.13　調査区南東部の段築の状況を見るため一部拡張。トラバース測量開始
5.15　調査区西側斜面の第II層を掘り上げ、ＳＤ08のプラン検出。調査区北端部の切り通しの断面で土塁積土の状況を検討。地山上にある黒色土が積土か旧表土かが問題となる
5.16　ＳＤ08堆積土の掘り下げ作業開始(～5月27日)。トラバース測量終了
5.21　平面図作成のための基準点設定（～22日)。平板実測（～22日）
5.24　ＳＤ07プラン検出。堆積土の掘り下げ（～27日）
5.27　整地層Ｂとの関係をみるため、南東部の段築の部分を東側に拡張
5.28　全景写真撮影。遺り方設定開始（～６月５日）
5.29　南西隅から西側にかけて東西に長く拡張区を設定(南西拡張区)
5.30　南西拡張区で南北溝２条検出（ＳＤ10・11）
5.31　南西拡張区西端で南北溝１条検出（ＳＤ13)。本日までに調査区内の上層遺構の確認終了
6. 5　南西拡張区を調査区南端まで拡張。東西溝検出(ＳＤ12)
6. 6　上層遺構の平面図作成開始
6.12　ＳＤ09の在り方を見るため一部拡張
6.14　ＳＤ07南端部周辺の精査
6.15　ＳＤ09は第II層に覆われていることを確認。ＳＤ07南端部の西側において東西方向の落ち込みを確認(のち、ＳＤ08Ａの一部と推定)。調査区北東の状況把握のため北壁にトレンチを設定
6.17　北壁トレンチで南北溝検出（ＳＤ05）
6.22　整地層ＢとＳＸ02との関係を検討
6.24　調査区南東隅の整地層Ｂ除去。ＳＤ04がＳＸ01Ａの下に入り込んで行く状況を確認。
　ＳＸ02・ＳＤ07の断ち割り調査（～７月３日)。それぞれ古段階の状況を確認し、部分的に段階ごとに掘り進める
7. 3　整地層および土塁の下のＳＸ14･15の調査。すべての調査終了

4. 層　序

調査区中央部においては南北に土塁が延びており、表土を除去すると直ちにその積土やそれに関わる整地層Ａ・Ｂが現れた。土塁の西側や南西拡張区では第IIIａ・IIIｂ層を発見した。これらは直接的な上下関係がないため、新旧関係を明らかにできなかったものが多い。

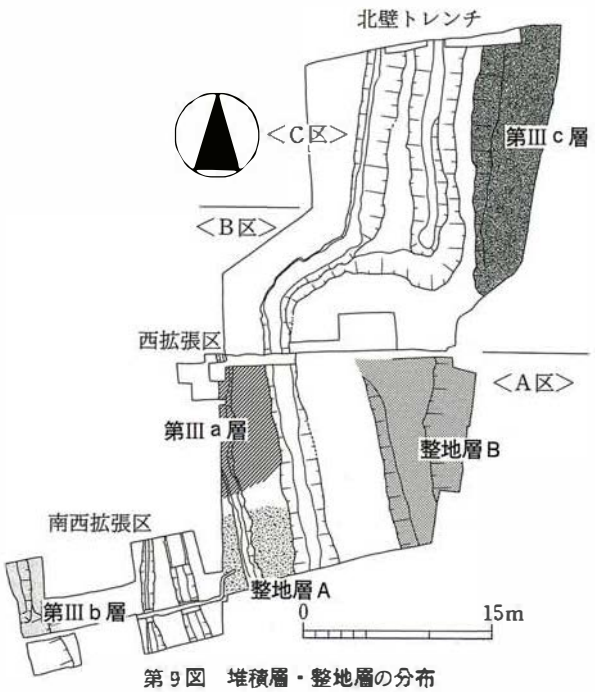
第Ｉ層　表土

第II層　にぶい黄褐色（10Ｙ R5/3）砂質土。南西拡張区で地山上に堆積している。現代の陶磁器等出土。

第IIIａ層　にぶい黄褐色（10Ｙ R4/3～5/4）砂質土。Ｓ－12ラインから北側に分布。この上面はＳＤ08Ｂの確認面となっている。ＳＤ09を覆っている。

第IIIｂ層　にぶい赤褐色（5Ｙ R4/3）砂質土。南西拡張区の西側斜面にのみ分布し、第II層に覆われている。硬く締まっている。遺物は出土していない。

第IIIｃ層　にぶい黄褐色（10Ｙ R4/3）砂質土。



第９図　堆積層・整地層の分布

ＳＸ02の東側にのみ分布し、ＳＤ05を覆っている。

整地層Ａ　褐色（10ＹＲ4/4）砂質土。調査区南端部からＳ―12ラインまで分布。この上面はＳＤ08Ｂの確認面となっている。中世の無釉陶器が出土している。第IIIａ層との関係は不明。

整地層Ｂ　黒褐色（10ＹＲ3/1）砂質土。ＳＸ01の東側に分布し、それを覆っている。

5.　発見した遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は、土塁３条、溝12条、土壇１基、焼土土壙２基である。以下、(1)土塁とその関連遺構、(2)土塁以前の遺構、(3)土塁との関係が不明な遺構の順に説明する。

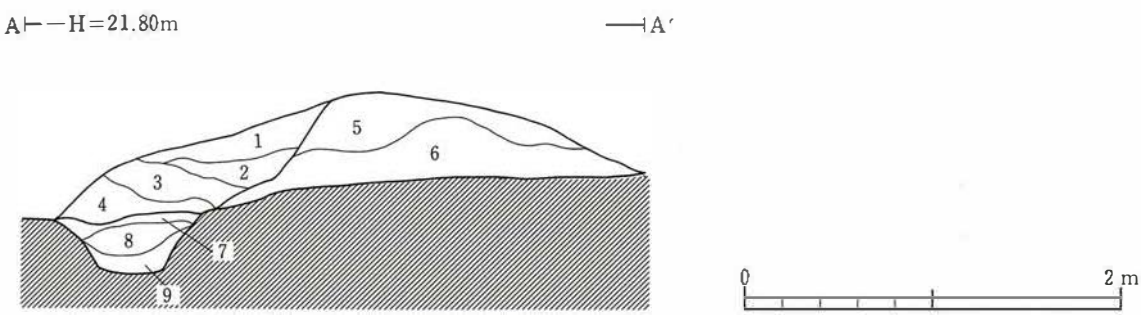
(1)　土塁とその関連遺構

①　ＳＸ01土塁とＳＤ08溝跡

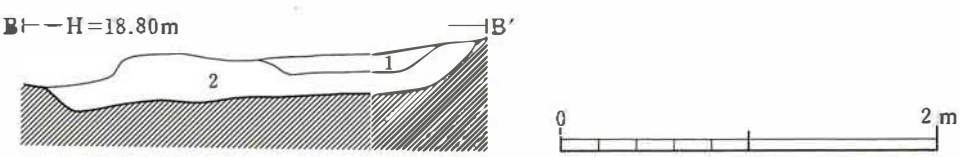
ＳＸ01は緩やかな丘陵北斜面に構築されている土塁である。調査区南端部から中央部にかけて南北にのびている。ＳＤ08はその西側に沿って延びている溝である。それぞれ１回の改修が認められる（Ａ→Ｂ）。

【ＳＸ01Ａ・ＳＤ08Ａ】ＳＸ01ＡとＳＤ08Ａはいずれも ＳＸ01Ｂの積土によって完全に覆われている。部分的な調査にとどまり、平面的にはそれぞれ8.5m検出したにすぎない。

ＳＸ01Ａは地山上に直接構築されたもので、厚さ10～30cmのにぶい黄褐色土と黒褐色土がほぼ水平に積み上げられている。[(4)] ＳＤ04・ＳＸ15と重複し、それらより新しい。方向は北で約14度西に偏している。基



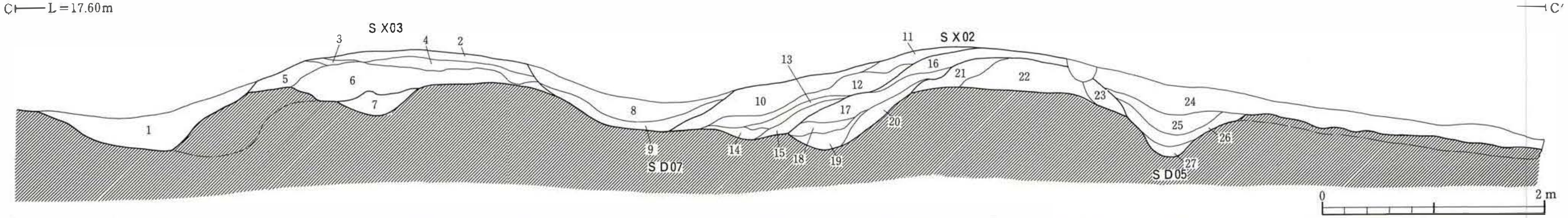
No.	土　色	土性	備　考	種　別
1	黄褐色10ＹＲ5/6	砂質土	しまりあり。	
2	黄褐色10ＹＲ5/8	砂質土	粘性・しまりあり。	
3	黄褐色10ＹＲ5/6	砂質土	粘性ややあり。	
4	褐色10ＹＲ4/6	砂質土	ボソボソの土。	
5	褐色7.5ＹＲ4/6	砂質土	地山粒含む。粘性・しまりあり。	ＳＸ01Ａ積土
6	暗褐色10ＹＲ3/4	砂質土	地山粒、炭化物含む。	
7	褐色7.5ＹＲ4/4	砂質土		ＳＤ04埋土
8	褐色10ＹＲ4/6	砂質土	硬くしまっている。	
9	黄褐色10ＹＲ5/6	砂質土	地山ブロック含む。粘性あり。硬くしまっている。	



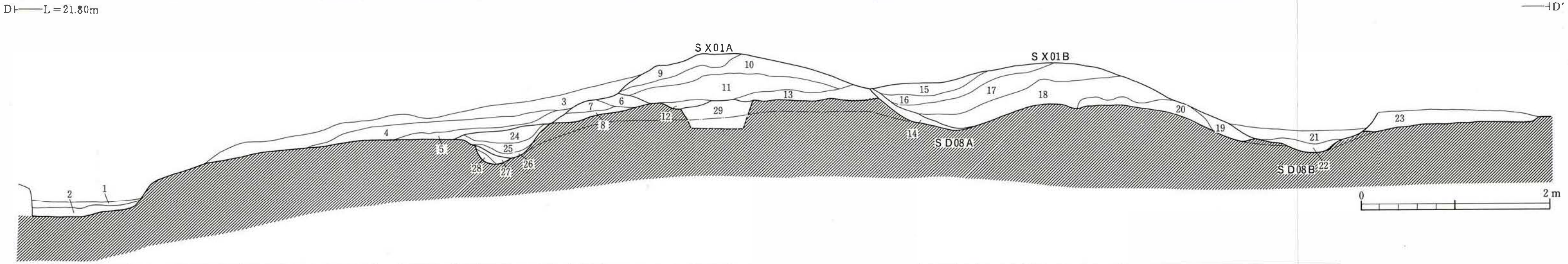
No.	土　色	土性	備　考	種　別
1	黄褐色10ＹＲ5/8	砂質土		ＳＤ18埋土
2	褐色10ＹＲ4/6	砂質土	粘性・しまりややあり。	

第10図　ＳＸ01Ａ・ＳＤ18断面図

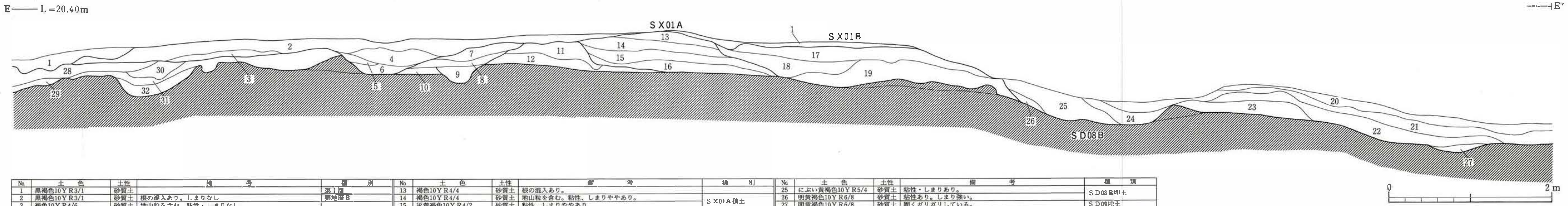
(4)　この土塁については、Ｓ―11.5、Ｓ―14ラインの断面観察によると明瞭な積み手の違いが観察される（第10･11図）。Ｓ―14ラインにおいては、東側から土塁側に向かって斜めに堆積している状況が顕著であることから崩壊土の可能性は考えられない。平面的には確認できなかったが、Ａ･Ｂ２時期の変遷以外にも更に細分される可能性を指摘しておきたい。



No.	土色	土性	備考	種別
1	にぶい黄褐色10ＹＲ4/3	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりややあり。	ＳＤ08Ｂ埋土
2	にぶい黄橙色10ＹＲ6/4	砂質土	根の混入あり。	
3	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりややあり。	
4	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりややあり。	ＳＸ03積土
5	褐色10ＹＲ4/4	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりややあり。	
6	にぶい黄褐色10ＹＲ5/3	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりややあり。	
7	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりややあり。	ＳＸ03以前の遺構埋土
8	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	根の混入あり。	ＳＤ07Ｃ埋土
9	にぶい黄褐色10ＹＲ5/3	砂質土	粘性・しまりあり。	
10	黄褐色10ＹＲ5/6	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりややあり。	
11	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりややあり。	
12	灰黄褐色10ＹＲ5/2	砂質土	粘性・しまりややあり。	ＳＸ02Ｃ積土
13	にぶい黄褐色10ＹＲ5/3	砂質土	粘性・しまりややあり。	
14	にぶい黄褐色10ＹＲ5/3	砂質土	粘性・しまりややあり。	
15	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	粘性・しまりややあり。	
16	褐色10ＹＲ4/4	砂質土	粘性・しまりややあり。	
17	にぶい黄褐色10ＹＲ4/3	砂質土	粘性・しまりややあり。	ＳＸ02Ｂ積土
18	灰黄褐色10ＹＲ5/2	砂質土	粘性・しまりややあり。	
19	にぶい黄褐色10ＹＲ5/3	砂質土	粘性・しまりややあり。	ＳＸ02Ｂ積土
20	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	粘性・しまりややあり。	
21	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりややあり。	
22	にぶい黄褐色10ＹＲ5/3	砂質土	粘性・しまりややあり。	ＳＸ02Ａ積土
23	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	粘性・しまりややあり。	
24	にぶい黄褐色10ＹＲ4/3	砂質土	根の混入が多い。	第III c層
25	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	粘性・しまりややあり。	ＳＸ02Ａ構築に伴う埋め戻し
26	にぶい黄褐色10ＹＲ4/3	砂質土	粘性・しまりややあり。	
27	褐色10ＹＲ4/4	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりややあり。	ＳＤ05埋土



No.	土色	土性	備考	種別
1	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	根の混入あり。	ＳＸ20Ａ埋土
2	明黄褐色10ＹＲ6/8	砂質土	根の混入あり。	
3	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	根の混入あり。	
4	にぶい黄褐色10ＹＲ5/3	砂質土	根の混入あり。	整地層B
5	暗灰黄褐色2.5Ｙ4/2	砂質土	地山粒を含む。	
6	黄褐色10ＹＲ5/6	砂質土	根の混入あり。	ＳＸ01Ａ積土或はそれより古い土塁積土
7	にぶい黄褐色10ＹＲ5/3	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりややあり。	
8	灰黄褐色10ＹＲ5/2	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりあり。	
9	黄褐色10ＹＲ5/6	砂質土	根の混入あり。	ＳＸ01Ａ積土
10	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	根の混入あり。	
11	黒褐色10ＹＲ3/2	砂質土	根の混入あり。	ＳＸ01Ａ積土
12	にぶい黄褐色10ＹＲ5/3	砂質土	炭化物を含む。粘性・しまりややあり。	
13	にぶい黄褐色10ＹＲ4/3	砂質土	炭化物をわずかに含む。粘性・しまりややあり。	
14	にぶい黄褐色10ＹＲ5/3	砂質土	地山粒多く含む。粘性・しまりあり。	ＳＸ08Ａ埋土
15	にぶい黄褐色10ＹＲ4/3	砂質土	パサパサしている土。根が混入。	ＳＸ01Ｂ積土
16	にぶい黄褐色10ＹＲ4/4	砂質土	根の混入が多い。	
17	黄褐色10ＹＲ5/6	砂質土	地山ブロックを含む。粘性・しまりあり。	
18	褐色10ＹＲ4/4	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりあり。	
19	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	根の混入が著しい。	
20	黄褐色10ＹＲ5/6	砂質土	炭化物をわずかに含む。粘性・しまりあり。	
21	褐色10ＹＲ4/4	砂質土	根の混入あり。	ＳＤ08Ｂ埋土
22	にぶい黄褐色10ＹＲ5/3	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりあり。	
23	褐色10ＹＲ4/4	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりあり。	第III層
24	褐色10ＹＲ4/6	砂質土	粘性・しまりあり。	ＳＤ04埋土
25	にぶい黄褐色10ＹＲ4/3	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりあり。	
26	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりあり。	
27	黄褐色10ＹＲ5/8	砂質土	硬くしまっている。	ＳＤ16埋土
28	明褐色7.5ＹＲ5/8	砂質土	地山ブロックを含む。硬くしまっている。	
29	褐色10ＹＲ4/4	砂質土	東壁に焼土と多量の炭化物がみられる。粘性・しまりあり。	ＳＸ15埋土



No.	土色	土性	備考	種別
1	黒褐色10ＹＲ3/1	砂質土		第I層
2	黒褐色10ＹＲ3/1	砂質土	根の混入あり。しまりなし	整地層B
3	褐色10ＹＲ4/6	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりなし。	
4	にぶい黄褐色10ＹＲ4/3	砂質土	粘性・しまりややあり。	
5	にぶい黄褐色10ＹＲ5/3	砂質土	粘性・しまりややあり。	
6	灰黄褐色10ＹＲ5/2	砂質土	粘性・しまりややあり。	
7	褐色10ＹＲ4/4	砂質土	根の混入あり。	ＳＸ01Ａ崩壊土或は積土
8	にぶい黄褐色10ＹＲ4/3	砂質土		
9	灰黄褐色10ＹＲ4/2	砂質土	粘性・しまりややあり。	
10	灰黄褐色10ＹＲ4/2	砂質土	地山ブロックを含む。粘性・しまりややあり。	ＳＸ01Ａ積土或はそれより古い土塁積土
11	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	地山粒をわずかに含む。粘性・しまりややあり。	
12	にぶい黄褐色10ＹＲ4/3	砂質土	地山粒をわずかに含む。粘性・しまりややあり。	
13	褐色10ＹＲ4/4	砂質土	根の混入あり。	
14	褐色10ＹＲ4/4	砂質土	地山粒を含む。粘性、しまりややあり。	ＳＸ01Ａ積土
15	灰黄褐色10ＹＲ4/2	砂質土	粘性、しまりややあり	
16	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	粘性、しまりややあり	
17	暗褐色10ＹＲ3/4	砂質土	根の混入あり。	ＳＸ01Ｂ積土
18	にぶい黄褐色10ＹＲ4/3	砂質土	粘性・しまりややあり。	
19	灰黄褐色10ＹＲ4/2	砂質土	地山ブロックわずかに含む。粘性・しまりややあり。	
20	黒褐色10ＹＲ3/1	砂質土	パサパサした土。根の混入あり。	
21	褐色10ＹＲ4/4	砂質土	根の混入あり。	第III a層
22	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	粘性・しまりややあり。	
23	にぶい黄褐色10ＹＲ4/3	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりあり。	
24	にぶい黄褐色10ＹＲ4/3	砂質土	地山粒を含む。粘性・しまりあり。	ＳＤ08Ｂ埋土
25	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	砂質土	粘性・しまりあり。	ＳＤ08Ｂ埋土
26	明黄褐色10ＹＲ6/8	砂質土	粘性あり。しまり強い。	
27	明黄褐色10ＹＲ6/8	砂質土	固くガリガリしている。	ＳＤ09埋土
28	褐色10ＹＲ4/6	砂質土	地山粒・炭化物を含む。ボソボソした土。	ＳＤ04埋土
29	明褐色7.5ＹＲ5/8	砂質土	硬くしまっている。	
30	褐色10ＹＲ4/6	砂質土	硬くしまっている。	
31	暗褐色10ＹＲ3/4	砂質土	地山ブロック、炭化物を含む。硬くしまっている。	
32	明褐色10ＹＲ5/6	砂質土	地山ブロック、炭化物を含む。硬くしまっている。	

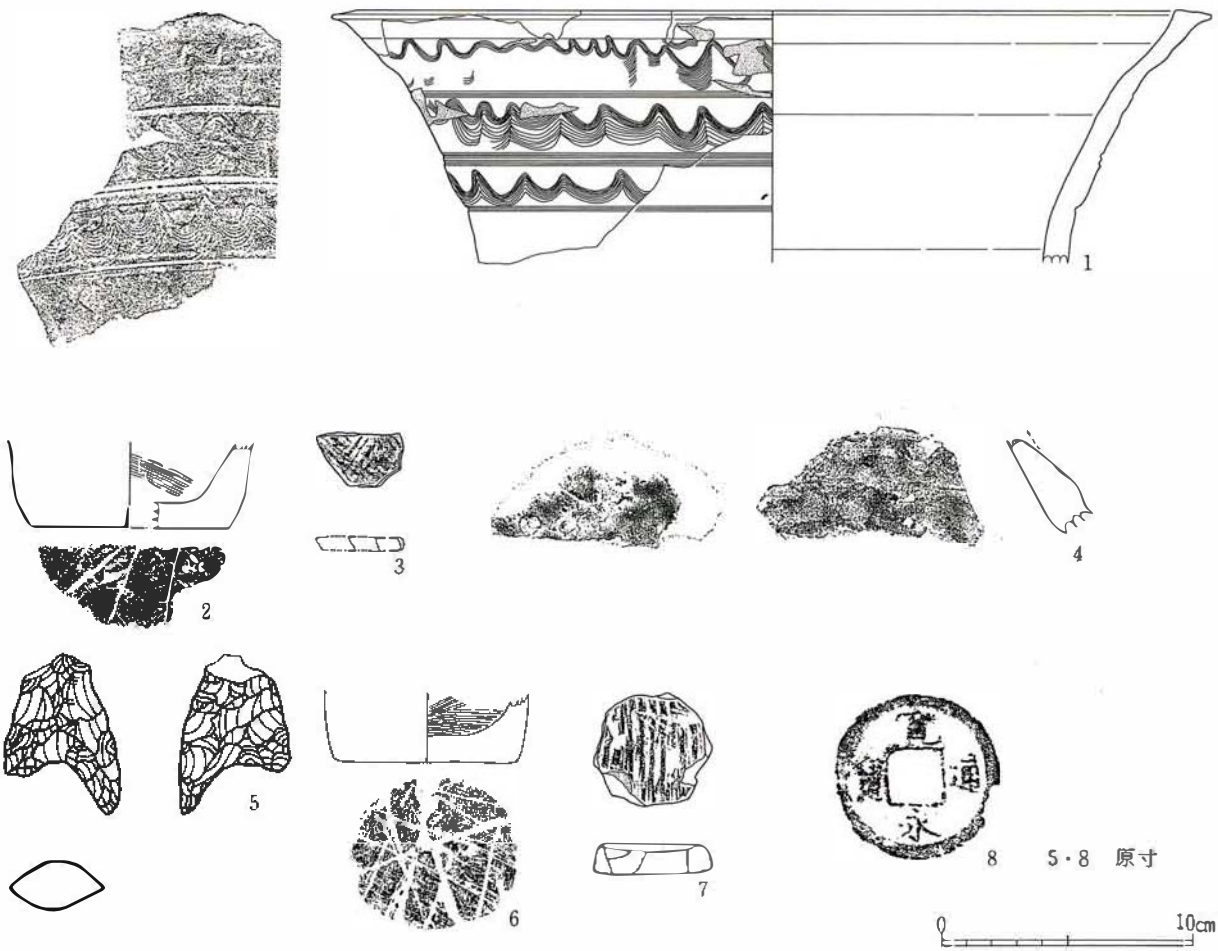
第11図　ＳＸ01・ＳＤ08断面図

底幅は3.5m、高さは0.5mである。遺物は、積土から須恵器甕、赤焼き土器高台杯、鉄滓が出土している。

ＳＤ08Ａは地山面で検出した。規模は、幅1.5〜1.8m、深さ30cmである。ＳＸ01Ａ土塁頂部との比高差は0.8mである。

【ＳＸ01Ｂ・ＳＤ08Ｂ・ＳＤ18・ＳＤ19】ＳＸ01ＢはＳＸ01Ａを拡幅して構築された土塁である。南北約14mにわたって確認した。ＳＤ08ＢはＳＸ01Ｂおよびその北東部に位置するＳＸ03の西側に沿って延びている溝である。直線距離にして42m確認した。

ＳＸ01ＢはＳＸ01Ａの西壁側にのみ積土が施され、西側に大きく拡幅されたものである。これによって



番号	種類	遺構	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号	図版番号
1	須恵器甕	ＳＸ01Ｂ	積土	【外面】3段の沈線・櫛描き波状文 【内面】ロクロナデ	(34.8)			R－2	11－2
2	土師器甕	ＳＸ01Ｂ	2層	【外面】体部：不明、底部：木葉痕 【内面】ユビナデ		(7.7)		R－6	
3	円盤状土製品	ＳＸ01Ｃ	積土	須恵器甕の体部破片を利用				R－15	
4	無釉陶器甕	ＳＸ01Ｃ	積土	【外面】自然釉、オリーブ褐2.5Y4/4 【内面】指頭圧痕→ヨコナデ、灰N5/ <胎土>浅黄2.5Y7/4				R－36	
5	石鏃	ＳＤ08Ｂ	1層	無茎、黒曜石製				R－63	11－5
6	土師器甕	ＳＤ08Ｂ	2層	【外面】体部：不明、底部：木葉痕 【内面】ユビナデ		(7.2)		R－5	
7	円盤状土製品	ＳＤ08Ｂ	2層	須恵器甕の体部破片を利用				R－13	
8	古銭[寛永通宝]	ＳＤ08Ｂ	2層					R－13	

第12図　SX01・SD08出土遺物

ＳＤ08Ａは完全に埋められている。積土は、ＳＤ08Ａの西側の高い方から低い方へ斜めに積まれている。この積土はＳＤ08Ａの西側では高さ45cmであり、ＳＸ01Ａの頂部より約10cm低い。また、ＳＸ01ＡとＳＸ01Ｂの最も高い部分との間、すなわちＳＤ08Ａの上は浅い溝状の窪みとなっている。遺物は、積土から土師器杯・甕、須恵器杯・甕、無釉陶器甕、円盤状土製品が出土している。土師器甕には底部に木葉痕のあるものがある（第12図２）。須恵器甕は頸部に３段の沈線と波状文を巡らされたものが出土している（第12図１）。円盤状土製品は須恵器甕の体部破片を加工したものである（第12図３）。

ＳＤ08Ｂは№１トレンチでは整地層Ａ上面、№２トレンチでは第III層上面で検出した。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は№１トレンチでは土塁側から強く流れ込んだ状況である。№２トレンチでは第Ｉ層が堆積した時点でまだ窪みを残している。規模は、幅1.8～2.0m、深さ30～54cmである。ＳＸ01Ｂ土塁頂部との比高差は0.9～1.2mである。遺物は、埋土１層から土師器杯・甕、須恵器杯・甕、古銭「仙台通宝」、不明鉄製品、不明銅製品、石鏃が出土している。石鏃は無茎タイプであり、黒曜石製である。２層から土師器杯・甕、古銭「寛永通宝」、円盤状土製品が出土している。土師器甕は非ロクロ調整であり、底部に木葉痕がある（第12図６）。円盤状土製品は須恵器甕の体部を加工したものである（第12図７）。

ＳＤ19はＳＸ01Ｂの北端部においてその積土下から発見した溝である。ＳＤ08Ｂによって西側が破壊されている。平面的にはわずか4.5m検出したのみであるが、南北溝であり、Ｎ－１ライン付近で大きく東側に屈曲して北側に延びている。規模は、幅1.5m以上、深さ39cmである。壁の立ち上がりは緩やかであり、埋土は土塁とは反対の西側の低い方から入りこんだような状況である。

ＳＤ18はＳＸ01Ｂの北東部で発見した東西溝である。ＳＸ17土壇の整地層に覆われており、地山面で検出した。東側はＳＤ07Ｃ、西側はＳＤ08Ｂによってそれぞれ破壊されており、東西3.7m検出したのみである。方向は、東でわずかに北に偏している。規模は、幅2.8m、深さ38cmである。壁は緩やかに立ち上がっており、底面はやや北に傾斜している。埋土の状況はＳＤ19と同様である。遺物は、埋土１層から土師器杯・甕の体部破片が数点出土している。

ＳＤ19については、№２トレンチにおいて対応すると考えられる落ち込みが観察されており、それらの延長線上にはＳＤ08Ａがある。ＳＤ18についてもＳＤ19の北東延長線上にあり、層位的にも矛盾しない。ＳＤ08Ａ・ＳＤ18・ＳＤ19はＮ－１ラインで東側に屈曲するという点でＳＤ08Ｂときわめて類似した在り方を示すところから、一連の遺構である可能性が高い。

②　ＳＸ06土壇

調査区南半部で発見した土壇である。ＳＸ01Ｂの北半部に盛土整地して造成されており、範囲は南北約８m、東西約11mである。上面はほぼ平坦である。

③　ＳＸ03土塁

調査区北半部で発見した南北方向の土塁である。調査区北壁から約16mにわたって検出した。第Ｉ層を除去すると直ちに積土が現れ、その西側にＳＤ08Ｂ、東側にＳＤ07が並行して延びている。構築にあたっては、にぶい黄褐色土が地山面にほぼ水平に粗く積まれている。方向は、北で東に約４度偏している。規模は、基底幅2.8m、高さ45cmである。

遺物は、積土から須恵器瓶が出土している。

④　ＳＸ02土塁とＳＤ07溝跡

ＳＸ02は調査区北東部で発見した南北方向に延びる土塁である。ＳＸ06土壇の北東部に接続している。

ＳＤ07はその西側に沿って延びる南北溝である。ＳＸ02・ＳＤ07ともに３時期の変遷が確認されている（Ａ→Ｂ→Ｃ）。

【ＳＸ02Ａ・ＳＤ07Ａ】ＳＸ02Ａ・ＳＤ07Ａはいずれも ＳＸ02Ａ・Ｂによって完全に覆われているためＢ・Ｃ期の積土を数箇所断ち割って部分的に検出したものである。

ＳＸ02Ａは地山上に直接積土を施されたものである。規模は、基底幅約２ｍ、積土の高さは55cmである。東西に緩やかに屈曲しながら延びている。

ＳＤ07Ａは調査区北壁で見ると幅1.1ｍ以上、深さ50cmである。

【ＳＸ02Ｂ・ＳＤ07Ｂ】ＳＸ02Ｃの積土の西側２分の１を取りはずし、約21ｍにわたって検出した。

ＳＸ02ＢはＳＤ07Ａを埋め、西側に拡幅されている。構築にあたり、東側すなわち土塁のある方向から西側に向かって積まれている。方向は、東西方向に緩やかに屈曲してはいるが両端を結んだ線でみるとおおよそ発掘基準線に一致している。規模は、基底幅3.1ｍ、積土の高さは60cmである。

ＳＤ07Ｂは調査区北壁で見ると幅1.1ｍ以上、深さ40cmである。

【ＳＸ02Ｃ・ＳＤ07Ｃ】ＳＸ02Ｃは約21ｍ、ＳＤ07Ｃは約17ｍ検出した。

ＳＸ02ＣはＳＤ07Ｂを埋め、西側に拡張している。積土の構築方法はＢ期と同様である。方向についてもおおよそＢ期と同様である。規模は、基底幅4.2ｍ、積土の高さは60cmである。遺物は、積土から土師器杯、須恵器杯・長頸瓶・甕、瓦質土器、砥石などが出土している。須恵器甕は頸部に３段の沈線と波状文が巡らされたもので、ＳＸ01Ｂ出土資料と接合した（第12図１）。

ＳＤ07Ｃは調査区北壁で見ると幅1.0ｍ、深さ30cmである。遺物は、埋土１層から土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、不明銅製品などが、２層から須恵器杯・瓶が出土している。

⑤　ＳＸ20腰郭

調査区北東部で発見した腰郭である。段とその下に平担面を造り出したものでＳＸ01の東側に位置している。南北約12ｍ、東西約４ｍにわたって確認した。同位置で１回の改修が認められる。

【ＳＸ20Ａ】地山面を削平して造成したもので整地層Ｂによって覆われている。段の高さは約0.7ｍで、壁はやや急になっている。

【ＳＸ20Ｂ】ＳＸ20Ａを覆う整地層Ｂによって構築されたものである。段の高さは約0.9ｍで、壁はＳＸ20Ａより緩やかである。

⑵　土塁以前の遺構

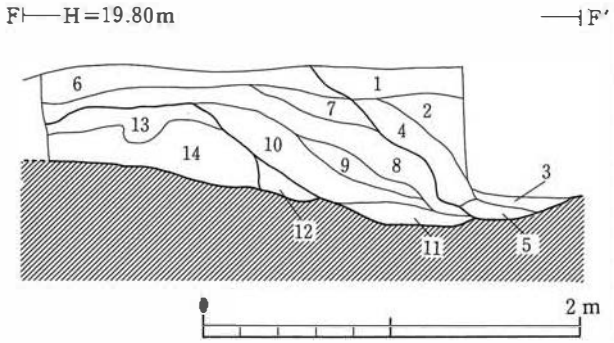
土塁以前の遺構としてはＳＤ05・04・16・09溝跡、ＳＸ14・15窯状遺構がある。

①　ＳＤ05溝跡

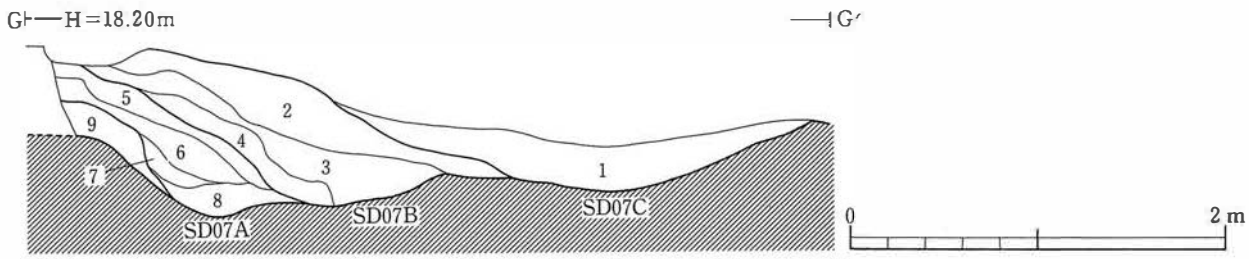
調査区北東部で発見した南北溝である。調査区北壁から約12ｍにわたって検出した。第IIIｃ層に覆われており、地山面で検出した。ＳＸ02土塁と重複しており、それより古い。方向は、Ｎ－15ラインから北側では北で東に約12度偏しているが、南側では南北発掘基準線にほぼ一致している。規模は、幅1.7～2.2ｍ、深さは30～38cmである。断面の形状はＶ字形である。堆積土は、上層がにぶい黄褐色土、下層が褐色土であり、いずれも東西両側から流れ込んだ状況で堆積している。

なお、Ｎ－１ラインの断ち割り調査によってその延長部分と見られる落ち込みを確認しているので、さらに南側に延びていることが考えられる。

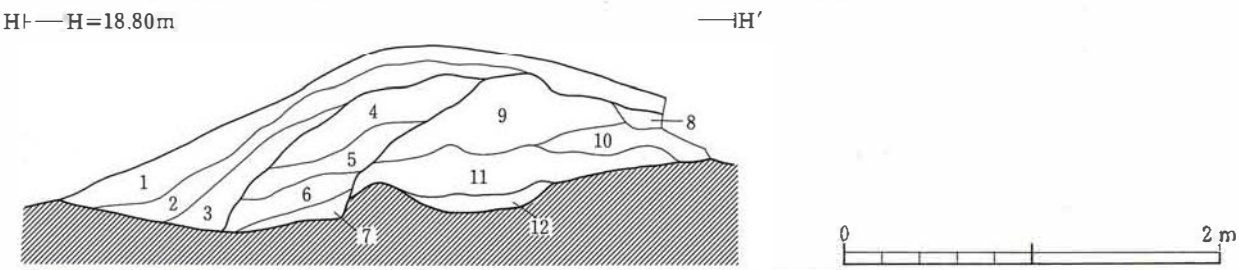
遺物は、堆積土１層から土師器杯・甕、須恵器杯・甕、灰釉陶器瓶、無釉陶器甕、２層から須恵器甕が



No	土　色	土性	備　考	種　別
1	褐色10YR4/6	砂質土		SX02C積土
2	褐色10YR4/6	砂質土	地山粒、炭化物を含む。硬くしまっている。	
3	黄褐色10YR5/6	砂質土	地山ブロックを含む。	
4	褐色10YR4/6	砂質土		
5	黄褐色10YR5/8	砂質土	地山粒、炭化物を含む。	
6	にぶい黄褐色10YR4/3	砂質土		SX02B積土
7	黄褐色10YR5/6	砂質土	地山粒含む。硬くしまっている。	
8	黄褐色10YR5/8	砂質土	地山粒を含む。硬くしまっている。	
9	黄褐色10YR5/6	砂質土		
10	黄褐色10YR5/8	砂質土	地山粒を含む。硬くしまっている。	
11	黄褐色10YR5/6	砂質土	地山粒を含む。粘性強い。硬くしまっている。	SD07A埋土か SX02B積土
12	黄褐色10YR5/8	砂質土		
13	褐色10YR4/4	砂質土	炭化物わずかに含む。粘性・しまりややあり。	SX02A積土
14	褐色10YR4/4	砂質土		

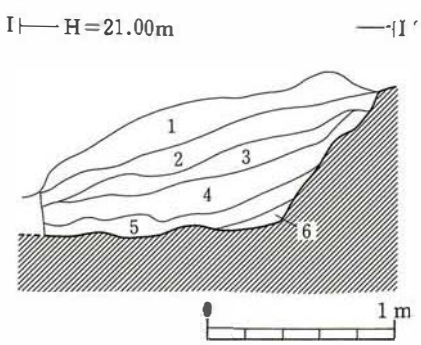


No	土　色	土性	備　考	種　別
1	黄褐色10YR5/8	砂質土	地山粒を含む。しまり弱い。	SD07C埋土
2	黄褐色10YR5/6	砂質土	地山粒を含む。しまり弱い。	SX02C積土
3	褐色10YR4/6	砂質土	地山粒、炭化物を含む。粘性・しまりなし。	
4	黄褐色10YR5/6	砂質土	粘性・しまりややあり。	
5	黄褐色10YR5/6	砂質土	粘性あり。	SX02B積土
6	褐色10YR4/6	砂質土	地山粒、炭化物を含む。粘性・しまりあり。	
7	褐色10YR4/6	砂質土	硬くしまっている。	
8	黄褐色10YR5/8	砂質土	粘性あり。硬くしまっている。	
9	黄褐色10YR5/6	砂質土	地山粒、炭化物を含む。粘性・しまりあり。	



No	土　色	土性	備　考	種　別
1	黄褐色10YR5/8	砂質土	地山粒、炭化物をわずかに含む。	SD02C積土
2	褐色7.5YR4/4	砂質土	地山粒、炭化物をわずかに含む。	
3	明褐色7.5YR5/6	砂質土	地山粒、炭化物を含む。硬くしまっている。	
4	明褐色7.5YR5/8	砂質土	硬くしまっている。	SX02B積土
5	明褐色7.5YR5/6	砂質土	地山粒を含む。硬くしまっている。	
6	黄褐色10YR5/8	砂質土	地山粒、炭化物を含む。粘性あり。硬くしまっている。	
7	黄褐色10YR5/6	砂質土	地山粒、炭化物を含む。硬くしまっている。	
8	暗褐色10YR3/4	砂質土	根の混入あり。	SX02A積土
9	黄褐色10YR5/8	砂質土	炭化物を含む。硬くしまっている。	
10	明黄褐色10YR6/8	砂質土	炭化物を含む。硬くしまっている。	
11	褐色10YR4/6	砂質土	地山粒、炭化物を含む。	
12	黄褐色10YR5/6	砂質土	地山ブロックをわずかに含む。粘性・しまりあり。	SD05埋土

第13図　SX02断面図



No	土　色	土性	備　考	種　別
1	褐灰色7.5YR4/1	砂質土		SX20埋土
2	灰黄褐色10YR6/2	砂質土	しまりなくボサボサした土	
3	にぶい黄橙色10YR6/3	砂質土	地山を粒状に含む	
4	にぶい黄橙色10YR6/4	砂質土	地山小ブロック、炭化物を含む。しまりあり。	
5	明黄褐色10YR6/4	砂質土	地山粒、炭化物を含む。	
6	黄橙色7.5YR6/6	砂質土	褐色の粘質土を含む。	

第14図　SX20断面図

出土している。灰釉陶器瓶は体部破片である。体部最大径は約10.5cmと推定される(図版11－6)。無釉陶器甕も体部破片である。外面はヘラナデ、内面はヨコナデ調整されている。

② ＳＤ04溝跡

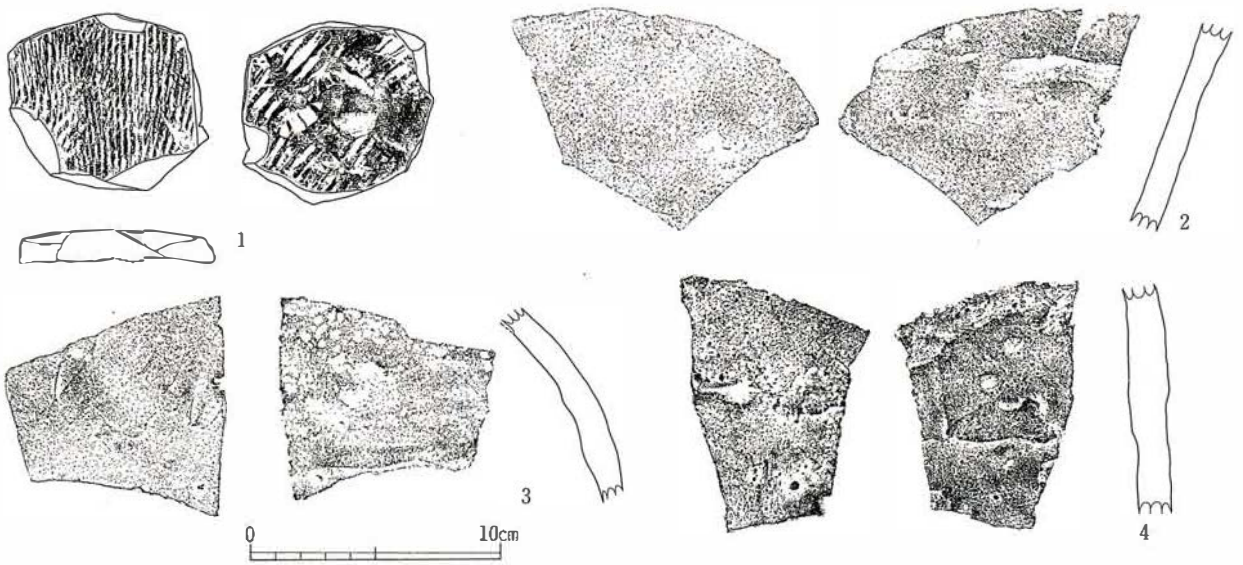
調査区南東隅で発見した南北溝である。整地層Ｂに覆われ、地山面で検出した。ＳＤ16と重複しており、それより新しい。北側はＳＸ14の南側で途切れているが、南側はＳＸ01Ａ土塁の下に入り込み、さらに延びている。検出できたのは12.5mである。北半分は東側へ、南半分は西側へ緩やかに湾曲している。検出した範囲においてその両端を結んだ線で方向をみると北で約15度東へ偏している。規模は、幅0.7～1.0m、深さ32～36cmである。

遺物は、埋土１層から土師器杯、須恵器杯・甕、円盤状土製品が各１点出土している。土師器杯はコップ形の杯の底部破片であり、須恵器杯は底部が回転ヘラケズリされたものである。円盤状土製品は須恵器甕の体部破片を加工したものである（第15図１）。

③ ＳＤ16溝跡

調査区南東隅で発見した南北溝である。整地層Ｂに覆われ、地山面で検出した。南北ともＳＤ04に切られており、約６m検出したにとどまった。方向は、北で西へ緩やかに湾曲しているが、直線的な部分で見ると北で約19度東へ偏している。規模は、幅0.5～0.6m、深さは14cmである。

なお、トレンチの断面においてＳＤ04より古い深さ42cmの溝跡を確認している。これは、堆積土のあり



番号	種　類	遺　構	層位	特　　徴	口　径	底　径	器　高	登録番号	図版番号
1	円盤状土製品	ＳＤ04	１層	須恵器甕体部破片を利用				R－12	
2	無釉陶器甕	ＳＤ09	２層	【外面】ヘラナデ、にぶい黄褐10Y R4/3 【内面】ヨコナデ、褐灰10Y R5/1 ＜胎土＞褐灰10Y R5/1				R－29	12－8
3	無釉陶器甕	ＳＤ09	２層	【外面】ヘラナデ、褐7.5Y R4/3 【内面】指頭圧痕→ヨコナデ、灰N 5/ ＜胎土＞にぶい黄橙10Y R7/4、赤い粒子を含む				R－30	12－4
4	無釉陶器甕	ＳＤ05	１層	【外面】ヘラナデ、褐7.5Y R4/3 【内面】ヨコナデ、にぶい黄2.5Y6/4 ＜胎土＞外：灰白10Y R8/1 内：褐灰10Y R6/1				R－32	12－5

第15図　SD04・09・05出土遺物

かたおよび位置関係、またＳＤ04との重複関係から本溝跡の可能性が高く、さらに南側へ延びている可能性がある。

④　ＳＤ09溝跡

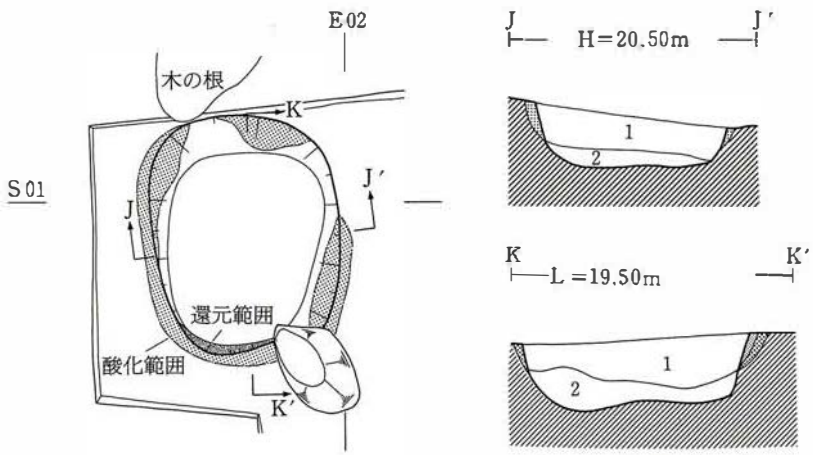
調査区南西部で発見した南北溝である。第Ⅲａ層に覆われており、地山面で検出した。調査区南壁から西壁にかけて約19m検出しているが、それぞれさらに南北に延びている。方向は、南側では北で約14度西に偏しているが、北側では南北発掘基準線とほぼ一致している。底面は北側に向かって傾斜している。上端ラインは凹凸が目立つ。規模は、幅0.9～1.3m、深さは北側はわずか10cmであるが南側の最も深いところでは36cmである。

遺物は、埋土２層から須恵器瓶・甕、無釉陶器甕が出土している。

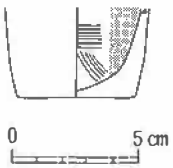
⑤　ＳＸ14焼土土壙

調査区中央部東壁付近の緩やかな北斜面で発見した焼土土壙である。ＳＸ06土壇の積土に覆われており、地山面で検出した。平面形は南北にやや長い楕円形であり、規模は長径65cm、短径54cmであり、深さはおおむね15cmである。壁は全体が赤変硬化しており、南側の一部はさらにその内側が還元状態になっている。立ち上がりの角度についてみると、南側の立ち上がりが急であり、他の３面はそれより緩やかである。底面はほぼ平坦であり、炭化物層が厚く堆積している。おおむね４cmであるが北側は厚く12cmである。その上には焼けた壁の細片や炭化物を含む層が堆積している。

遺物は、埋土１層から土師器杯が１点出土している(第16図)。体部がほぼ直立するコップ形の器形である。外面は剥落しているが底部に糸切り痕がわずかに観察され、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。



No	土　色	土性	備　考
1	褐色10YR4/4	砂質土	焼けた側壁の細片や炭化物を含む。ややしまりあり。
2	炭化物層		



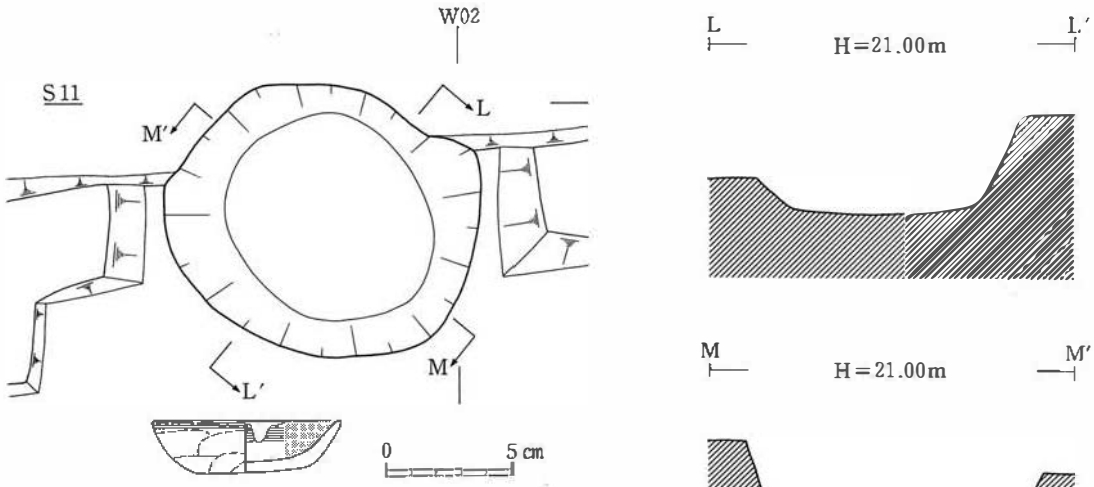
種　類	層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	登録番号
土師器杯	1層	【外面】体部：磨滅 底部：糸切り？ 【内面】ヘラミガキ・黒色処理		(4.2)		R－4

第16図　SX14平面・断面図・出土遺物

⑥　ＳＸ15焼土土壙

調査区南半部の緩やかな北斜面で発見した焼土土壙である。ＳＸ01Ａ土塁の積土に覆われており、地山面で検出した。平面形は東西にやや長い楕円形であり、規模は長径84cm、短径70cmであり、深さはセクションベルトでみると約30cmである。壁の角度は西側が東側に比べて急である。底面はほぼ平坦である。埋土には炭化物が多量に含まれている。特に東壁付近に焼土や炭化物が多く認められる。

遺物は、埋土１層から土師器小型杯、須恵器瓶が出土している。土師器小型杯は非ロクロ調整で底部は平底である。体部は口縁部付近まで手持ちヘラケズリされている。口縁部には油煙状の付着物があり、灯明皿として使用されたと考えられる（第17図）。



種　類	層位	特　　徴	口径	底径	器高	図版番号
土師器杯	１層	【外面】口縁部：ヨコナデ 体部～底部：手持ちヘラケズり 【内面】ヘラミガキ・黒色処理 ◎灯明皿として使用	7.5	4.8	2.1	Ｒ－３

第17図　SX15平面・断面図・出土遺物

(3)　土塁との関係が不明な遺構

調査区南西部および南西拡張区で発見した遺構としてはＳＤ10・11・12・13溝がある。

①　ＳＤ10溝跡

南西拡張区の地山面で発見した南北溝である。長さ8.5m検出した。ＳＤ12と重複しており、それより古い。方向は北で約15度西に偏している。壁の立ち上がりは東側と比較して西側がやや急である。上端ラインは直線的である。規模は、幅が1.5～1.8m、深さ0.5mである。

遺物は、堆積土１・２層から土師器甕が出土している。

②　ＳＤ11溝跡

南西拡張区の地山面で発見した南北溝である。ほぼ平坦な地形の西端部に位置しており、本溝から西側に向かって傾斜している。長さ8.7m検出した。ＳＤ12と重複しており、それより古い。方向は、南側がやや東側に偏しているが、大部分は南北発掘基準線とほぼ一致している。規模は、一部くびれている部分で0.5m、広い部分で1.4mであるがおおむね0.9mである。深さは、南端部では42cm、北端部では25cmである。壁の立ち上がりは東側と比較して西側がやや急である。埋土上層は地山小ブロックを多く含んだ約15cmの層であり、人為的に埋められた可能性がある。

遺物は、堆積土１層から土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、赤焼き土器杯・高台鉢、円盤状土製品などが出土している。赤焼き土器杯には内面に油煙状付着物の認められるものがある。２層から土師器杯、須恵器杯、赤焼き土器杯が出土している。

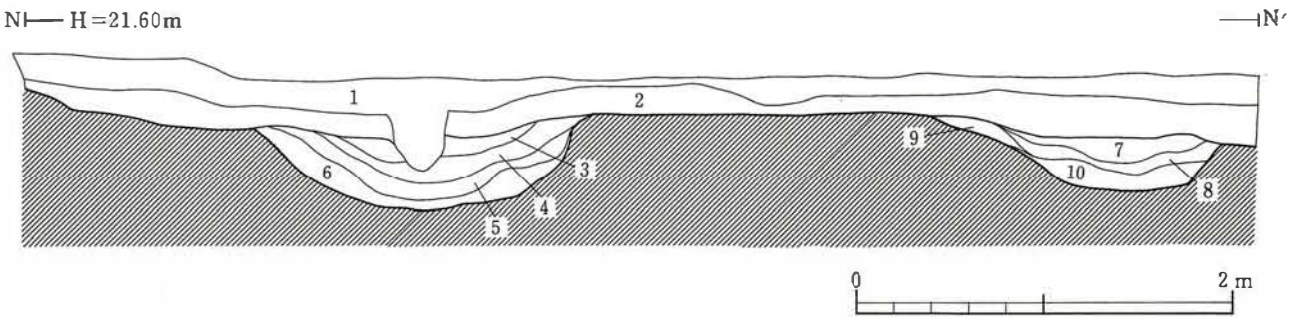
③　ＳＤ12溝跡

南西隅から南西拡張区にかけての地山面で発見した東西溝である。東側は屈曲してＳＤ09の0.5m西側で止まっているが、西側はさらに調査区外へ延びている。直線距離にして約8.5m検出した。方向は、直線的な部分でみると東で約15度北に偏している。底面は、東半分はほぼ平坦であるが、西半分は西側へ傾斜している。規模は、幅0.2～0.5m、深さ4.7cmである。

④　ＳＤ13溝跡

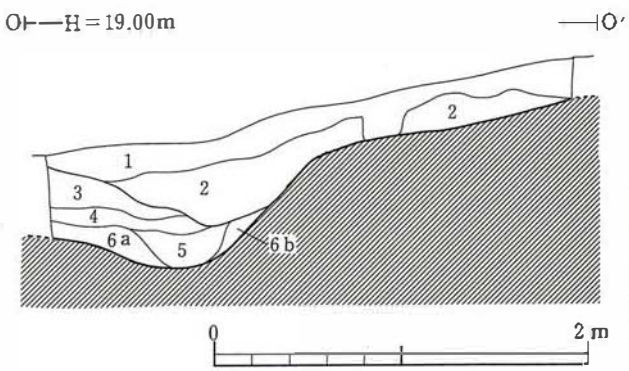
南西拡張区の西端部で発見した南北溝である。本溝跡は、調査対象地区である丘陵とその西側に位置する丘陵との間の最も低い位置にある。第IIIｃ層に覆われ、地山面で検出した。長さ4.8m検出したのみであるが、北側はさらに調査区外へ延びている。方向は、北で約14度西へ偏している。規模は、幅1.4～1.6mであり、深さは調査区北端部で55cmである。

遺物は、堆積土１層から須恵器甕・瓶などが出土している。



No	土　色	土性	備　考	種　別
1	黒褐色10YR2/2	砂質土	パサパサした土。根の混入あり。	第Ｉ層
2	黄褐色10YR5/6	砂質土	第II層	
3	褐色10YR4/6	砂質土	硬くしまっている。	ＳＤ10埋土
4	黄褐色10YR5/6	砂質土	硬くしまっている。	
5	褐色10YR4/6	砂質土	地山ブロックを含む。	
6	黄褐色10YR5/8	砂質土	地山ブロックを含む。硬くガリガリしている。	
7	明褐色7.5YR5/8	砂質土	地山ブロックを含む。硬くしまっている。	ＳＤ11埋土
8	褐色10YR4/6	砂質土	粘性・しまりあり。	
9	明褐色7.5YR4/6	砂質土	地山粒を含む。硬くしまっている。	
10	黄褐色10YR5/6	砂質土	地山ブロックを含む。硬くしまっている。	

第18図　SD10・11断面図

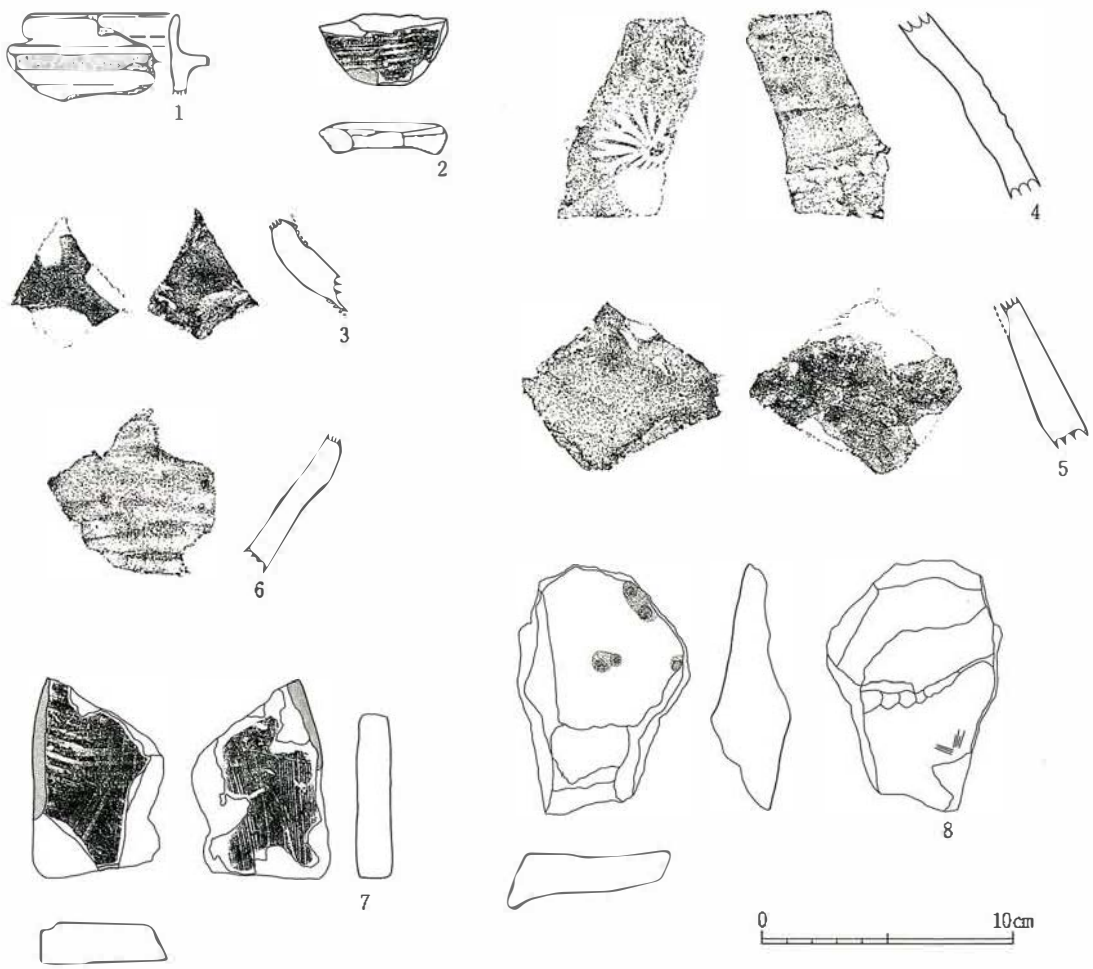


No	土　色	土性	備　考
1	灰褐色5YR4/2	砂質土	ボソボソの土。根の混入あり。
2	にぶい赤褐色5YR4/3	砂質土	粘性が強く、しまりあり。
3	にぶい褐色土7.5YR5/4	砂質土	ボソボソの土。
4	にぶい橙色7.5YR6/4	砂質土	地山粒わずかに含む。
5	灰褐色7.5YR4/2	砂質土	しまり弱い。
6a	にぶい褐色土7.5YR5/4	砂質土	粘性が強く、しまりあり。
6b	明黄褐色土10YR6/6	砂質土	地山ブロックを含む。

第19図　SD13断面図

(4) 遺構外出土の遺物

整地層Aからは土師器杯・羽釜、須恵器甕、無釉陶器甕、円盤状土製品、不明鉄製品が出土している。土師器羽釜は口縁部と鍔の一部が残存している小破片である(第20図1)。無釉陶器甕には菊花状の押印の施されたものが1点ある(第20図4)。円盤状土製品は須恵器甕の体部破片を加工したものである(第20図2)。



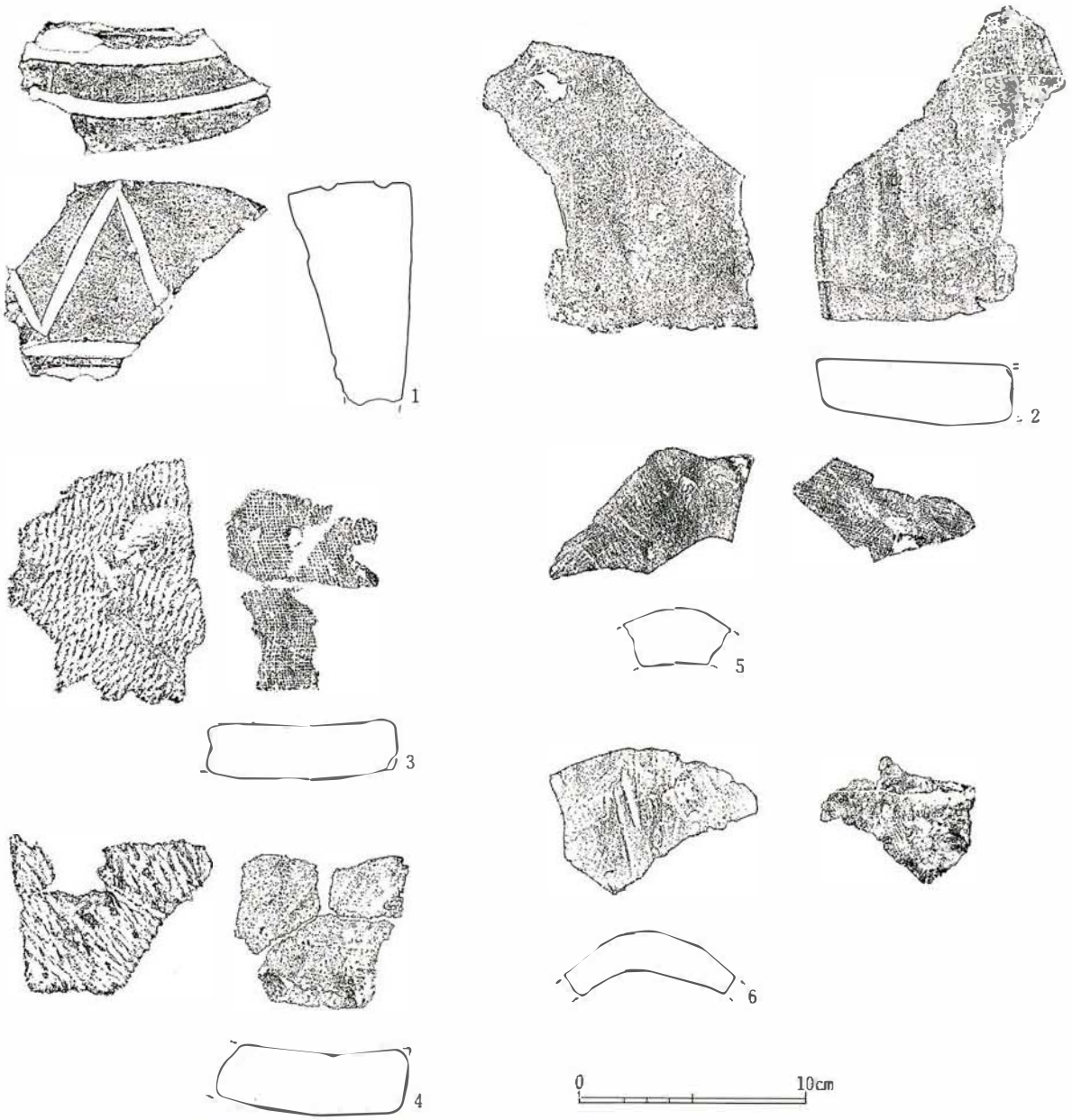
番号	種類	地区	層位	特徴	登録番号	図版番号
1	土師器羽釜		整地層A	【内・外面】ロクロナデ	R−42	11−4
2	円盤状土製品		整地層A	須恵器甕の体部破片を利用	R−14	
3	無釉陶器甕		整地層A	【外面】自然釉、浅黄5Y7/3 【内面】ヨコナデ、灰5Y6/1 ＜胎土＞灰黄2.5Y6/2	R−35	11−7
4	無釉陶器甕		整地層A	【外面】自然釉、黄褐2.5Y5/6 【内面】ヨコナデ、灰N5/ ＜胎土＞にぶい黄2.5Y6/3、赤い粒子を含む ◎菊花文の押印	R−34	11−10
5	無釉陶器甕		整地層B	【外面】ヘラナデ、にぶい黄褐10YR5/4 【内面】ヨコナデ、褐10YR4/4 ＜胎土＞にぶい黄褐10YR5/4	R−27	11−9
6	無釉陶器擂鉢		第II層	【外面】体部：ヨコナデ→下端をヨコ方向に手持ちヘラケズリ 【内面】使用により磨滅 ＜胎土＞灰白10YR7/1、白色粒を多く含む	R−23	11−2
7	研磨痕のある土器片	北壁トレンチ	第II層	須恵器甕体部破片の割れ口の一部を研磨	R−59	
8	砥石	西拡張区	第II層		R−58	

第20図　整地層A・B、第II層出土遺物

整地層Bからは土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、無釉陶器甕、軒平瓦が出土している。軒平瓦は、瓦当面に重弧文、顎部に鋸歯文が施されたものである（宮城県多賀城跡調査研究所分類番号511）。

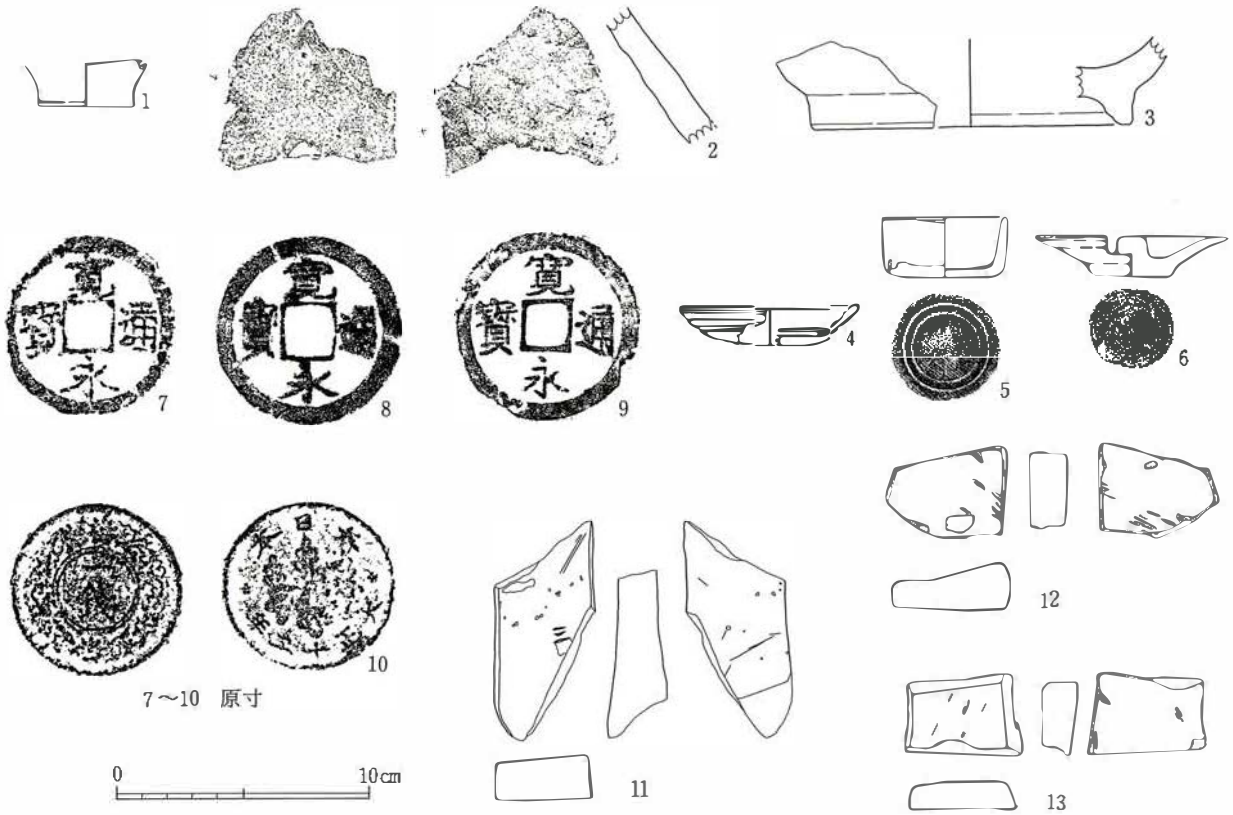
第II層からは土師器甕、須恵器甕、無釉陶器擂鉢が出土している。無釉陶器擂鉢は体部破片であり、外面にヨコナデ調整による凹凸が顕著に残っている。胎土は灰白色を呈しており、東海地方の製品と推定される（第20図6）。

第Ⅰ層からは土師器杯・甕、須恵器杯・高台杯・瓶・甕、赤焼き土器杯・高台杯、灰釉陶器瓶、かわらけ、白磁壺、無釉陶器甕・擂鉢、古銭「寛永通宝」、鉄滓、不明鉄製品、不明銅製品および近・現代の陶磁



番号	種　類	地　区	技　法	分　類	特　徴	登録番号
1	軒平瓦	Z	桶巻き作り		手描き重弧文511	R—21
2	平瓦	北壁トレンチ	桶巻き作り	ⅠA—a類		R—66
3	平瓦	C区	一枚作り	ⅡC類		R—67
4	平瓦	Z	一枚作り	ⅡB類		R—68
5	丸瓦	南西拡張区	粘土板巻き作り	ⅠA類		R—65
6	丸瓦	南西拡張区	粘土板巻き作り	ⅠA類		R—64

第21図　第Ⅰ層出土遺物(1)



番号	種　類	地　区	特　徴	口　径	底　径	器　高	登録番号	図版番号
1	かわらけ	Z	【外面】ロクロナデ 【内面】磨滅 ◎高台は厚く、高い	7.6	3.2	1.6	R－48	
2	無釉陶器甕	南西拡張区	【外面】自然釉、暗オリーブ7.5Y4/3 【内面】指頭圧痕→ヨコナデ 灰黄褐10Y R5/2 ＜胎土＞にぶい黄橙10Y R6/3		(12.4)		R－49	11－3
3	無釉陶器擂鉢	B区	【外面】体部：ヨコナデ→下端をヨコ方向に手持ちヘラケズリ→高台貼付→ヨコナデ 【内面】使用により磨滅 ＜胎土＞灰5Y6/1、白色粒を多く含む		(3.8)		R－55	11－1
4	陶器皿	Z	【外面】体部：施釉、褐2.5Y4/4 底部：回転ヘラケズリ 【内面】施釉、黄褐2.5Y4/4	(7.1)	(2.7)	1.4	R－11	
5	陶器湯飲	南西拡張区	【外面】体部：施釉、黄褐2.5Y5/6 底部：回転ヘラケズリ 【内面】施釉、黄褐2.5Y5/6	5.0	4.6	2.3	R－8	
6	陶器蓋	Z	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切 にぶい黄橙10Y R6/4 【内面】施釉、黄褐2.5Y5/6	7.6	3.2	1.6	R－7	
7	古銭［寛永通宝］	Z					R－11	
8	古銭［寛永通宝］	A区					R－12	
9	古銭［寛永通宝］	南西拡張区					R－10	
10	古銭［一銭］	Z	大日本大正十二年				R－18	
11	砥石	B区					R－18	
12	砥石	Z					R－45	
13	砥石	南西拡張区					R－19	

第22図　第Ⅰ層出土遺物(2)

器が出土している。土師器杯には非ロクロ調整で体部に段のある古墳時代後期頃のものが1点出土している。灰釉陶器瓶は体部と底部の破片が各1点出土している。接合しないがＳＤ05溝出土資料と色調・胎土が類似しており、同一個体の可能性がある。そのうち底部破片についてみると、高台の存在を示すわずかな高まりが観察され、さらに外面中央部にのみ砂の付着が認められる(図版11－７)。底径は6cm以上である。かわらけは底部の破片資料が1点出土している。底部は体部より3倍以上も厚く作っており、いわゆる柱状高台といわれているものに近い形態である(第22図１)。無釉陶器擂鉢は高台が付いているタイプである。体部下半は横方向にヘラケズリしており、その後高台を貼付してヨコナデ調整している。胎土は灰白色を呈しており、東海地方の製品と推定される（第22図３)。

その他、分布調査の際に、青磁碗の小破片を1点採集している。口縁部の一部をＶ字状に小さくえぐり、輪花の装飾を施したものである。13・14世紀頃の製品と考えられる。

6. 遺構の変遷と年代

今回の調査で発見した遺構は、土塁およびその関連遺構（Ｂ群）とそれ以前の遺構（Ａ群)、またそれらとの関係が明らかでない遺構（Ｃ群）の三者に大きく区分される。以下各遺構の変遷と年代について検討する。

(1) Ａ　群

このグループに属する遺構としてはＳＤ04、ＳＤ05、ＳＤ09、ＳＤ16、ＳＸ14、ＳＸ15がある。これらは、出土遺物から見て古代に属するものと中世以降のもの（ＳＤ05・09）とに大きく区分される。

古代の遺構と見られるものは土師器が出土したＳＸ14・15である。土器はいずれも床面から出土したものではないが、ＳＸ15から出土した土師器小型杯はおおよそ8世紀後葉頃のものと考えられ、ほぼ完形資料であることから遺構もその年代に近いと判断した。ＳＸ14から出土した土師器小型杯は多賀城跡の調査で9世紀初頭から前葉頃としているものに類似している。

中世の遺構と見られるものはＳＤ05とＳＤ09である。これらの埋土からは無釉陶器甕が出土していることからおおよそ中世頃と考えておきたい。

ＳＤ04は埋土から古代の土器が数点出土しており、それより古いＳＤ16からは遺物は出土していない。これらはＳＤ05と方向がほぼ同じであり、しかもその延長線上に位置していることが注意されるが、両者の関係は不明である。したがって年代についても不明である。

(2) Ｂ　群

前節において記述したように、これらの遺構は土塁と溝とが一連の施設として存在したと考えられる。即ち、ＳＸ01とＳＤ08（各Ａ・Ｂ)、ＳＸ02とＳＤ07（各Ａ～Ｃ)、ＳＸ03とＳＤ07Ｃ、ＳＤ08ＢとＳＸ03はそのように見ることができ、ひいてはＳＸ01Ｂ、ＳＤ08Ｂ、ＳＸ03、ＳＤ07Ｃ、ＳＸ02Ｃは同時期に機能していたと推定される。また、ＳＸ01Ｂの北半部に位置するＳＸ06は、ＳＸ01Ｂを覆って造成されたものであるが、その北東部にはＳＸ02Ｃが取り付いていることからＳＸ02Ｃおよびそれと一連の他の遺構とも同時期に機能していたと考えられる。ＳＸ01Ｂとの新旧関係は、工程差とは見なし難いことから、ＳＤ08はＳＸ01Ｂの構築からＳＸ06の造成に至るまで存在したと考えておきたい。

従って、ＳＸ01Ｂ(南半部のみ)、ＳＤ08Ｂ、ＳＸ03、ＳＸ02Ｃ、ＳＤ07Ｃ、ＳＸ06は同時期に存在した遺構群として考えることができ、これらより新しい遺構は発見できなかったことから、本遺跡における最

終段階の遺構と見ることができる。ＳＸ01Ｂ、ＳＸ02Ｃ、ＳＸ03などの土塁が直接表土に覆われていることや、ＳＤ08Ｂ、ＳＤ07Ｃが完全に埋没することなく、調査前まで溝状の窪みとして地表面からも観察できたことはその事実を裏付けるものであろう。

ＳＸ01・ＳＤ08のＡ期とＳＸ02・ＳＤ07のＡ・Ｂ期との関係については明らかにできなかった。しかし、ＳＤ18・19即ちＳＤ08ＡがＳＤ07Ｃと重複し、その東側には延びていないことや、ＳＸ01・ＳＤ08のＢ期はＡ期よりやや西側に拡幅した状況ではあるがほぼ同位置で屈曲して延びている状況を考慮するならば、ＳＸ01・ＳＤ08のＡ期とＳＸ02・ＳＤ07のＡ・ＢについてもＣ期と同様に一連の施設として機能していた可能性が考えられる。

以上のことから、Ｂ群の遺構は大きく２段階に区分することができる（Ｉ期→II期）。両者とも細分できる要素は認められるもののいずれも判定材料に乏しく、ここでは可能性を指摘するにとどめておきたい。

Ｉ期　ＳＸ01Ａ・ＳＤ08ＡとＳＸ02・ＳＤ07Ｂ或いはＳＸ02・ＳＤ07Ａが一連の区画施設として存在したと推定される時期。

II期　ＳＸ01Ｂ・ＳＤ08ＢとＳＸ02Ｃ・ＳＤ07Ｃが存在し、新たにＳＸ03が加わる時期。さらに、最終的にはＳＸ01Ｂの北半部に大規模な盛土整地を施してＳＸ06を造成している。

次に、これらの年代について検討する。手がかりとなる資料は少ないが次のものがある。

① ＳＸ02Ａは無釉陶器甕が出土したＳＤ05より新しい。

② ＳＸ01Ｂ積土から無釉陶器甕が出土している。

③ ＳＤ08Ｂの確認面である整地層Ａから無釉陶器甕が出土している。

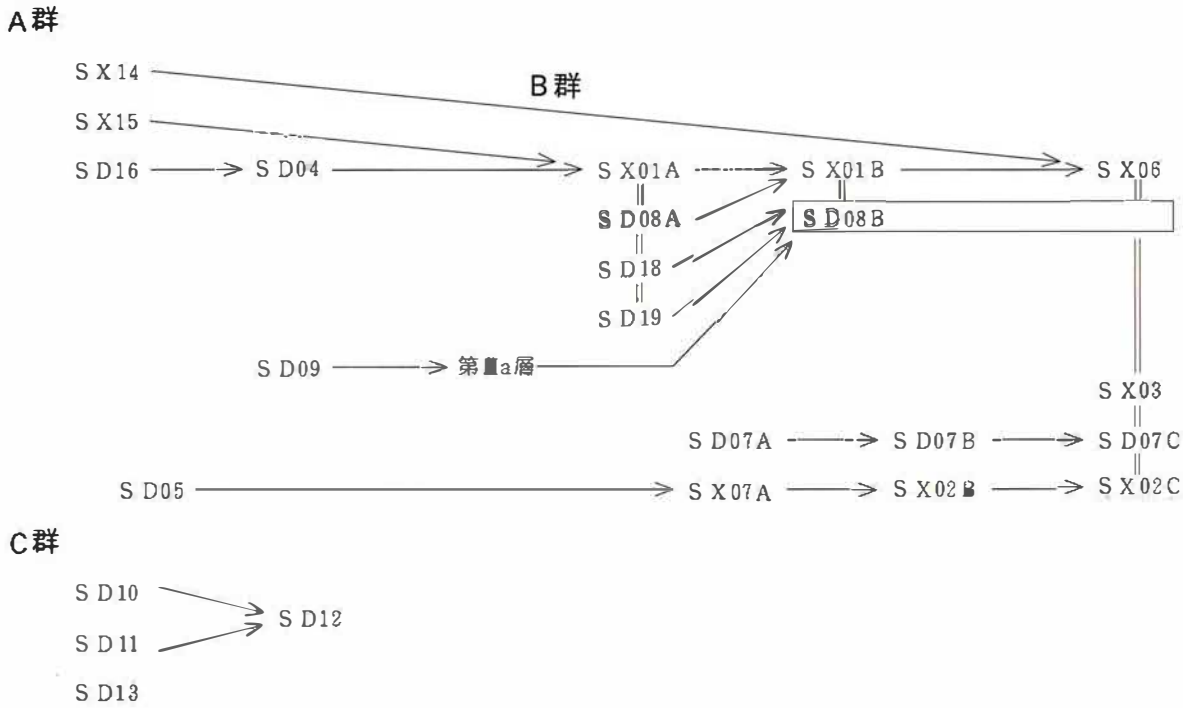
④ ＳＤ08Ｂの１層から仙台通宝、２層から寛永通宝が出土している。

①～③の無釉陶器甕の詳細な年代は不明であるが、これらの遺構の上限年代が中世であることを示している。④については、前者の初鋳年代が1784年、後者が1626年である。このうち、前者については埋土の最上層から出土していることから本遺構の下限年代を示すものと見られ、18世紀後半頃には完全に埋没したことが知られる。後者の資料はＳＤ08Ｂ機能時のものかそれ以降のものか判断は難しいが、近世以降に土塁や溝で区画した施設は基本的に構築されないという考えに従えば埋没していく過程で混入したと見るのが自然であろう。従って、これらの遺構の年代については大きく中世頃と捉えておきたい。

(3) Ｃ　群

土塁およびその関連遺構との関係が不明な遺構としてＳＤ10・11・12・13がある。出土遺物は、ＳＤ10・11・13から古代の土器が出土している。特にＳＤ11から比較的多く出土しており、古代の遺構である可能性が高い。年代は、１・２層より赤焼き土器が出土していることから10世紀前葉頃と考えられる。ＳＤ10・13については古代の土器が数点出土しているのみであるが、ＳＤ08ＢやＳＤ09など中世の遺構の埋土とは全く異なっていることから古代の遺構である可能性が高いと考えておきたい。

以上の遺構の関係を整理すると次のとおりである。



7. 焼土土壙について

焼土土壙としたＳＸ14・15について少し詳しく触れておきたい。はじめに、これらの特徴を挙げると次の５点である。

① 形態的には平面形がほぼ円形

② 底面はほぼ平坦

③ 壁の立ち上がりは一方が急であり、その反対側は比較的緩やか

④ 壁および底部の一部が熱を受けて硬化している。特に壁の急な側に顕著

⑤ 底面に厚い炭化物層が形成されている。

④と⑤の特徴から本遺構が火に関わることは確実である。しかも、還元状態のため内側が灰黒色を呈し、その外側は赤褐色と色調も変化していることからかなりの高さまで温度を上げていたことが推定される。③と④の特徴は燃料を投入する方向が一定していることを想定させる。遺構に伴う遺物は出土していないが、このような特徴をもつ遺構は土器の焼成施設とされているものに類似しているように思われる。[5]

同様の特徴を持つ遺構は本遺跡周辺では高崎遺跡第16次調査で１基[6]、同遺跡第20次調査で１基[7]発見されている。いずれも年代は不明である。

8. 出土遺物について

第１次調査で出土した遺物には、土器、陶器、磁器、瓦、土製品、石器、石製品、金属製品、鉄滓など

(5) 窯跡研究会編『古代の土師器生産と焼成遺構』 1997

(6) 多賀城市教育委員会『高崎遺跡―第13～16次調査報告書―』多賀城市文化財調査報告書第42集 1996

(7) 平成８年度調査。未報告。

がある。表土および堆積層から出土したものが多く、確実に遺構に伴う資料は少ないが、各時代の遺物が出土していることから本遺跡を理解する上で手がかりになると考えられる。以下、時代ごとに整理し、簡単に説明する。

(1) 縄文時代の遺物

無茎の石鏃（第12図５）が１点出土している。材質は黒曜石である。[8] 高崎丘陵において縄文時代の遺構は未だ発見されていないが、土器や石器は各遺跡から少数出土している。

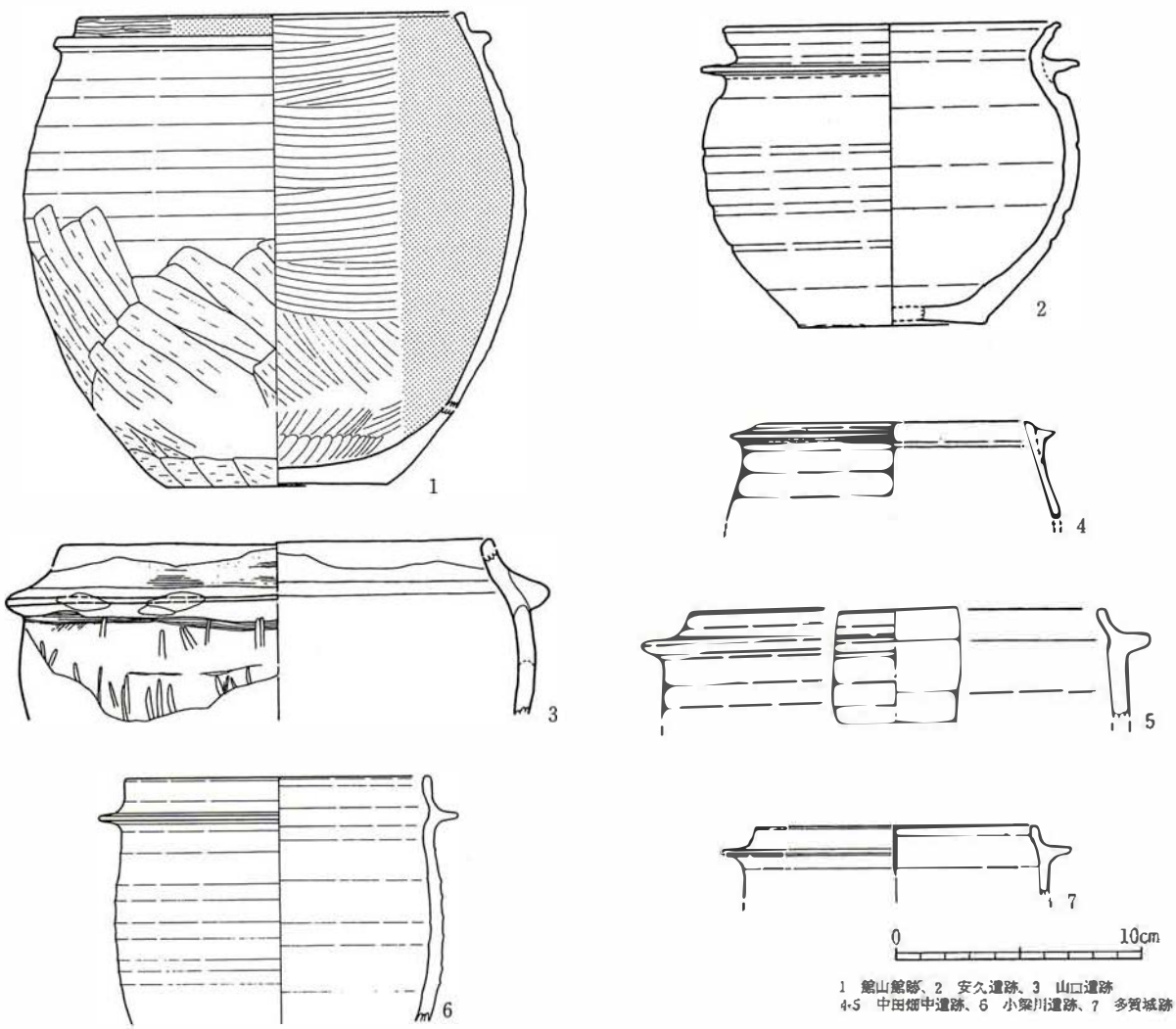
(2) 古代の遺物

土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、瓦が出土している。

① 土師器

杯、甕、羽釜がある。杯はすべて内面がヘラミガキ・黒色処理されるもので、形態がわかるものには体部がほぼ直立するものと小型のものがある。

第16図は、体部がほぼ直立し、器高が高い杯である。このタイプの杯は多賀城跡でも数点出土しており、そのうち第62次調査ＳＩ2151出土資料に類似している。同資料は９世紀初頭～前葉頃に位置づけられてお



1 鎧山鎧塚、2 安久遺跡、3 山口遺跡
4･5 中田畑中遺跡、6 小梁川遺跡、7 多賀城跡

第23図 宮城県内出土の羽釜

(8) 石材については宮城県多賀城跡調査研究所の柳沢和明氏に御教示頂いた。

り[9]、本資料もおおよそその頃のものと考えられる。第17図は、小型の杯である。非ロクロ調整であり、外面は口縁部がヨコナデ、体・底部にヘラケズリが施される。底部は平底である。口縁部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。

羽釜（第20図１）は口縁部と鍔部の小破片である。内・外面ともロクロナデされ、口縁部はほぼ直立し、端部はやや外反する。外面の口縁部から1.5cm下に鍔があり水平に巡っている。羽釜は、県内では、仙台市安久遺跡[10]、中田畑中遺跡[11]、山口遺跡[12]、津山町柳津館山館跡[13]、七ケ宿町小梁川遺跡[14]、多賀城市多賀城跡[15]、西沢遺跡[16]から出土しているが、まだ10例に満たない（第23図）。津山町柳津館山館跡出土例はロクロ調整の後、内面がヘラミガキ・黒色処理されたものであるが、他の資料はすべてロクロナデによって仕上げられている。本例は、形態的には小梁川遺跡や多賀城跡出土資料に類似している。小梁川遺跡では共伴した土師器からその年代を９世紀後葉としており[17]、本資料の年代もおおよそその頃と考えられる。

② 須恵器

杯、蓋、高台付杯、甕、長頸瓶がある。

甕（第12図１）は、頸部外面が３段の沈線で区画され、その間に櫛描き波状文が施されたものである。このような特徴を持つものは、県内では、仙台市土手内窯跡の３号窯[18]、利府町硯沢窯跡のＢ２号窯[19]などで出土している。年代については、前者が田辺昭一による陶邑窯編年のＴＫ217型式期並行（７世紀第２四半期～中葉）とされ、後者が８世紀中葉とされることから本資料も概ね７～８世紀に属するものと考えられる。

③ 赤焼き土器

杯、高台付杯、高台鉢がある。いずれも小破片で特徴的な部分は残っていない。

④ 灰釉陶器

瓶の体部破片２点、底部破片１点が出土している。接合しないが色調・胎土が類似し、同一個体と考えられる。

⑤ 瓦

軒丸瓦１点、軒平瓦２点、丸瓦15点、平瓦29点が出土している。軒平瓦（第21図１）は、桶巻き作りによるものであり、瓦当面に重弧文、顎部に鋸歯文が施されたものである。宮城県多賀城跡調査研究所の分類番号511である。丸瓦・平瓦についても、同研究所の分類に従えば丸瓦15点のうちＩＡ類が２点、IIＢ類２点、平瓦29点のうちＩＡ類が16点、IIＢ類が８点、IIＣ類が３点となる。

(3) 中世の遺物

かわらけ、無釉陶器、磁器がある。

---

(9) 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡　宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』1993
(10) 仙台市中田第一土地区画整理組合『安久遺跡発掘調査略報』1975
(11) 仙台市教育委員会『中田畑中遺跡』仙台市文化財調査報告書第53集　1983
(12) 仙台市教育委員会『山口遺跡II』仙台市文化財調査報告書第61集　1984
(13) 宮城県教育委員会『柳津館山館跡』宮城県文化財調査報告書第102集　1984
(14) 宮城県教育委員会『七ケ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書１』宮城県文化財調査報告書第107集　1985
(15) 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡　宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』1992
(16) 多賀城跡の東辺に近接した調査区において、鍛冶炉や竪穴式の工房などを多数発見している。平成７年度調査。未報告。
(17) 註７と同じ
(18) 仙台市教育委員会『土手内』仙台市文化財調査報告書第165集　1992
(19) 宮城県教育委員会『硯沢・大沢窯跡ほか』宮城県文化財調査報告書第116集　1987

① かわらけ

底部破片が1点出土している(第22図1)。ロクロ調整で底部が厚く、いわゆる柱状高台といわれるものに類似する。

② 無釉陶器

甕、擂鉢がある。

甕は、体部破片が8点出土している。色調・胎土からすべて別個体である可能性が高い。いずれも粘土紐巻き上げ成形で、調整は内面がヨコナデ、外面がヘラナデである。酸化炎焼成されており、中世陶器の分類では瓷器系と呼ばれるものに属する。特徴的な部分がないため、これらの年代は不明である。生産地についても同様に不明であるが、焼成や胎土の様子は地元窯の製品より東海地方の製品に類似しているような印象を受ける。第20図4は菊花状の押印が施されたものである。同様な押印のある陶器は常滑窯(愛知県)から出土しており、同窯製品の可能性がある。[20]

擂鉢は、体部破片1点、底部破片1点が出土している。いずれも外面体部下半が横方向にヘラケズリされており、そのうち底部破片(第22図3)には高台が貼り付けられている。高台のある擂鉢は東北地方でも石巻市水沼窯跡や福島県梁川町八郎窯跡などで出土しているが、本資料は色調・胎土は灰色を呈しており、それらより東海地方の製品に類似している。赤羽一郎・中野晴久の常滑窯編年によれば、その5型式期(13世紀第2四半期)には高台を有するものが主流であり、その後半には平底のものが出現して、6a型式期(13世紀第3四半期)には高台が消滅するとされている。[21] これに従えば本資料の年代は、5型式期以前すなわち13世紀第2四半期以前と考えられる。

● 磁 器

白磁壺と青磁碗が出土している。いずれも小破片である。白磁壺は体部破片であり、四耳壺などの器種が推定される。青磁碗は口縁部に輪花が施されたもので、おおよそ13・14世紀の龍泉窯系のものとみられる。[22]

(4) その他の遺物

近世以降の陶磁器・古銭、土製品、石製品、鉄滓がある。

① 近世以降の陶磁器

杯、皿、蓋、湯飲、碗、鉢などが第Ⅰ層から出土している。いずれも小破片で年代や生産地については不明であるが、堤焼(仙台市)など地元の製品や相馬大堀焼(福島県)に類似しているものなどがある。第20図5は近代の汽車土瓶に伴う陶器の湯飲である。年代は大正〜昭和時代である。[23]

② 古 銭

寛永通宝が4点、仙台通宝が2点、桐一銭が1点出土している。寛永通宝はいわゆる「ス宝銭」で、1626年初鋳の古寛永一文銭である(第12図8、第22図7〜9)。

③ 土製品

円盤状土製品と研磨痕のある土器片がある。

---

(20) 福住高根古窯出土遺物の中に類例が認められる　常滑市役所『常滑窯業誌』1974
(21) 中野晴久「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』1995
(22) 森田勉「14〜16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　1982
(23) 窯業史博物館『汽車土瓶』1995

円盤状土製品としたものは、須恵器甕の体部破片を利用し、その周縁部を打ち欠いておおよそ円形に加工したものである（第12図３・７、第20図２）。同様な製品は多賀城市内の市川橋遺跡や山王遺跡から多数出土している。用途は不明であるが、確実に古代の層から出土しているものもある。研磨痕のある土器片も須恵器甕の体部片を利用したものであり、断面の一部に研磨痕が認められる（第20図７）。

④　石製品

砥石がある。擦痕の方向はいずれも斜めを基調としている(第22図11～13)。敲打痕が認められるものもある（第20図８）。

⑤　鉄　滓

試掘調査時に２点出土している。科学的な分析を行っていないため詳細は不明である。

8.　まとめ

①　中世の土塁と溝を発見した。

②　土塁と溝は一連の区画施設として存在し、２～３時期の変遷が認められる。

③　下層遺構として古代の焼土土壙を２基発見した。これらは土器焼成遺構の可能性がある。

Ⅲ　第３次調査

1.　調査要項

所　在　地　　宮城県多賀城市留ケ谷一丁目地内
調査面積　　200㎡（対象面積930㎡）
調査期間　　平成９年４月11日～６月26日
調査主体　　多賀城市教育委員会　　教育長　櫻井　茂男
調査担当　　多賀城市埋蔵文化財調査センター　　所長　木村　忠雄
調　査　員　　石川俊英　高橋圭藏　三浦幸子　車田　敦
調査協力者　　菅野昭市　鈴木嘉兵衛　赤間利夫　菅野廣志
調査参加者　　赤間栄二郎　浅野　眞　阿部トシ子　阿部　弘　安藤美喜子　伊藤正直
大河原政夫　太田恂一郎　大竹重次郎　小川ちよ子　小川光夫　小野玉乃
菅野恵子　熊谷きみ江　熊谷サツキ　後藤恵子　佐々木軍治　柴田幸四郎
菅原絹代　鈴木太仲　大道寺勉　武山あや子　角田静子　手嶋與美　南城美岐子
橋本　務　平山節子　福永孝二　藤田恵子　星　光治　水越朝治　森　栄一
矢萩栄四郎　山田弘子　渡邊義一　渡邊正一　渡辺ひで子　渡辺ゆき子

2.　調査に至る経緯

本調査は、市道中道株木線道路改良工事に係る事前調査である。

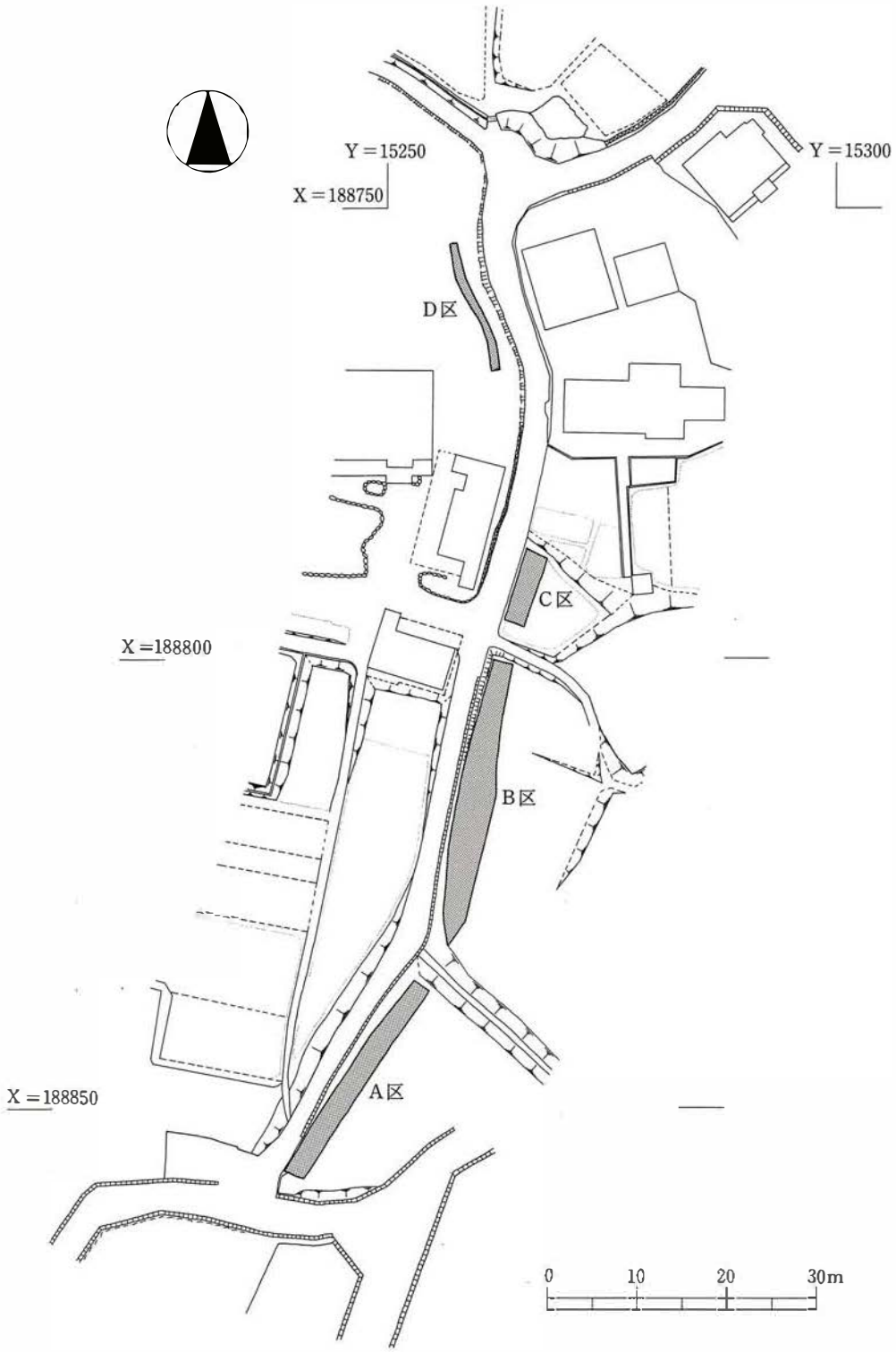
本件については、平成８年11月に多賀城市建設部道路課から文化財課に対して計画の内容が示され、埋蔵文化財との関わりについて照会があった。それによると、本遺跡のほぼ中央部を南北に延びている幅４ｍの既存の道路を、その東側斜面を掘削して幅６ｍに拡幅するというものであった。

当該地は第１次調査区と第２次調査区のほぼ中間に位置しており、第１次調査では古代から中世、第２次調査では中世・近世の遺構・遺物が発見されている。このことから、今回の対象地区においても同様な遺構・遺物の存在が予想された。特に第１次調査で発見した土塁や溝は今回の対象地区に向かって延びている可能性が考えられた。これらをふまえ、対象地区全体を発掘調査する必要があること、および拡幅部分は掘削を伴うことから事前調査で対応すべきであると判断した。その後、埋蔵文化財調査センターと道路課が調査日程等について協議を行い、平成９年４月11日から調査を開始した。

3.　調査方法と経過

(1)　調査方法

調査対象地区は東西４ｍ、南北200ｍである。そのうち、北端部の約25ｍは現道の西側に、それより南側の調査区はすべて現道の東側に位置している。また、南端部から約30ｍの地点には東側から延びる通路があり、その部分は地域住民の便宜を考慮して調査の対象から除外した。この結果、調査区は大きく北端地区、中央地区、南端地区に区分されることになり、南端地区をＡ区、中央地区南半部をＢ区、同北半部をＣ区、北端地区をＤ区として調査を進めた。



第24図　調査区位置図

実測図の作成に際し、A～C区の平面図は縮尺1/20で遺り方実測を行い、断面図も縮尺1/20で作成した。遺構を検出できなかったD区については縮尺1/100で平板実測を行った。

(2) 調査経過

今回の調査は4月11日から6月26日まで、実働45日間実施した。調査経過は以下の通りである。

4.11 B、C区北側から重機による表土除去
4.13 A、B区南側から人力による表土除去（～18日）
4.22 A、B区遺構検出作業開始
4.24 測量基準点設置。調査区内を3m方眼に割り付ける（～30日）
5. 2 C区遺構検出作業開始
5. 6 D区人力による表土除去、及び遺構検出作業開始（～7日）
5. 8 D区全景写真撮影
5.26 B区ベルトセクション図作成、及び写真撮影。D区平面図作成
6. 5 B区東壁セクション図作成。B・C区間の表土除去作業、及び遺構検出作業
6.13 C区で土壙検出状況の写真撮影。その後、精査
6.16 A区全景写真撮影
6.19 A区東壁セクション図作成
6.25 B区全景写真撮影
6.26 C区東壁セクション図作成、及び写真撮影。全ての調査終了

4. 発見した遺構と遺物

今回の調査では、溝跡6条、土壙1基、および柱穴などを発見した。各区ごとに層序が異なり、相互の関係も明らかでないため、以下地区ごとに説明する。なお、その他の遺構については、東壁断面でのみ確認したものであるため、詳細は不明である。

(1) A 区

① 層 序

第I層：黒褐色(10Y R3/2)砂質土。現代の表土である。

第II層：褐色(10Y R4/4)砂質土。調査区全域に認められ、北側では地山を直接覆い、南側では第III層の上に堆積している。

第III層：褐色(10Y R4/4)粘質土。調査区南側に分布し、地山上に直接堆積している。上面はSD94の確認面となっている。厚さは10～20cmである。a・b層に細分することができる。

② SD94溝跡

調査区南側で検出した東西溝跡である。第II層によって覆われており、第III層上面から掘り込まれていることを確認した。調査区外に延びているため、確認できた長さは約5mである。方向は北で約25度東に偏している。規模は、上幅2.9m以上、深さ80cmである。埋土は7層に区分することができる。1・2層はほぼ水平に堆積しており、3・4・5層は南側から強く傾斜したような状態で堆積している。遺物は土師器杯・甕、須恵器瓶、赤焼き土器杯などが出土している。土師器杯はロクロ調整されており、底部には回転糸切り痕が認められる。土師器甕もロクロ調整されたものが出土している。

③ SD95溝跡

調査区中央部の地山上で発見した南北溝跡である。規模は、長さ3.8m、上幅60cm、下幅40cm、深さ20cmである。方向は、北で約10度東に偏している。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土していない。

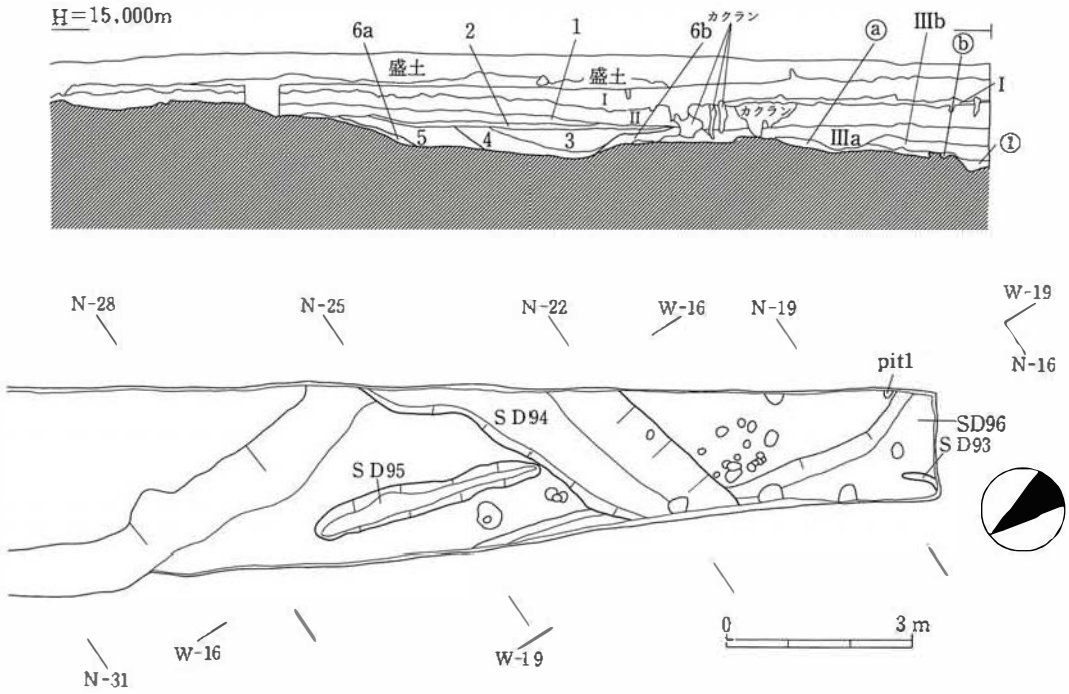
④ SD96溝跡

調査区南端部で検出した南北溝跡である。第III層によって覆われており、地山面から掘り込まれていることを確認した。SD93と重複し、それより新しい。南北約8mにわたって検出し、さらに調査区外にの

いる。南端部でやや東側に屈曲してはいるが、方向は北で約15度東に偏している。規模は、上幅1.5m以上、深さ20cmである。埋土はにぶい黄褐色土であり、炭化物や焼土を含んでいる。遺物は出土していない。

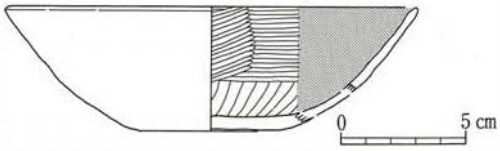
⑤　ＳＤ93溝跡

調査区南端部において、ＳＤ96の埋土を掘り上げた後に地山上で発見した南北溝跡である。調査区外に延びているため、確認できた長さは約0.6ｍである。方向は南で約30度西に偏している。規模は、上幅20cm、下幅10cm、深さ10cmである。埋土はにぶい黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。



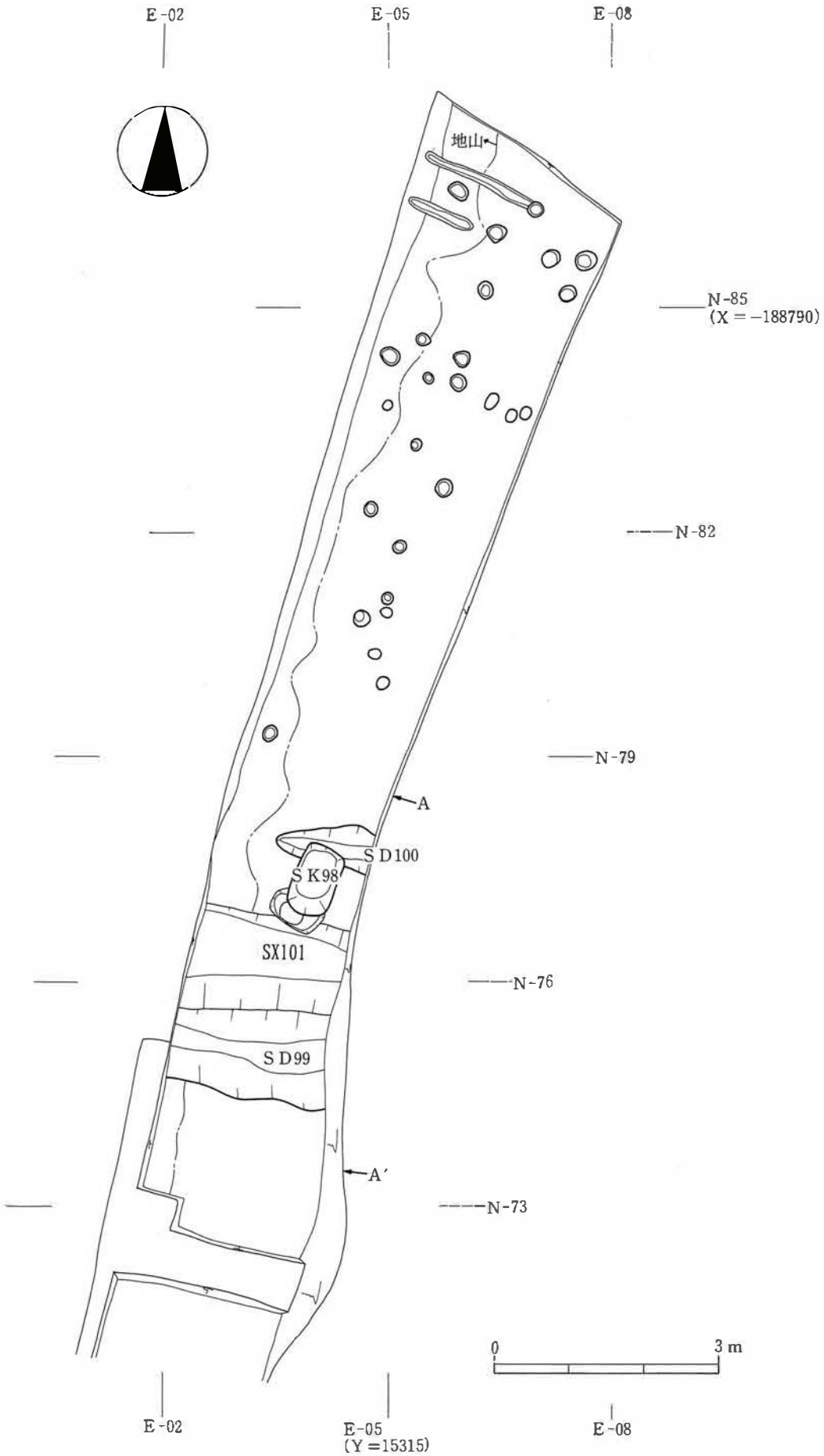
No	土　色	土性	備　考	種　別
I	黒褐色（10YR3/2）	砂質土	炭化物、酸化鉄、地山粒含む	
II	褐色（10YR4/4）	砂質土	炭化物、地山粒含む。	
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	砂質土	炭化物、酸化鉄、地山粒含む。	ＳＤ94埋土
2	褐色（10YR4/4）	砂質土	炭化物、酸化鉄、地山粒、地山レキ含む。	ＳＤ94埋土
3	褐色（10YR4/4）	砂質土	炭化物、酸化鉄、地山粒含む。	ＳＤ94埋土
4	褐色（10YR4/4）	砂質土	炭化物、酸化鉄を③より多く、地山粒含む。	ＳＤ94埋土
5	褐色（7.5YR4/3）	粘質土	炭化物、酸化鉄、地山粒含む。	ＳＤ94埋土
6a・b	褐色（10YR4/4）	砂質土	炭化物、酸化鉄、地山粒含む。	ＳＤ94埋土
IIIa	褐色（10YR4/4）	砂質土	炭化物、酸化鉄、地山粒含む。	
IIIb	褐色（10YR4/6）	粘質土	炭化物、酸化鉄、地山粒、地山レキ含む。	
①	黄褐色（10YR5/6）	粘質土	地山粒、地山レキ含む。	ＳＤ96埋土
ⓐ	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘質土	炭化物、酸化鉄、地山粒含む。	ＳＤ97埋土
ⓑ	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘質土	炭化物、酸化鉄、地山粒含む。	小ピット埋土

第25図　A区遺構配置図・東壁断面図



種　類	層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	登録番号
土師器杯	1-1	【外面】体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り 無調整 【内面】ミガキ後黒色処理	(16.4)	(5.7)	(4.9)	R—6

第26図　A区出土遺物



第27図　C区遺構配置図

(2) B・C区

B区では遺構を発見できなかった。C区において土壙1基、溝2条と柱穴を発見した。

① 層 序

B・C区の地形は南から北東に向かって緩やかに傾斜しており、C区北端から急に落ち込み始めている。

第Ⅰ層：褐色土(10YR4/6)。現代の表土。

第Ⅱ層：暗褐色土(10YR4/4)。調査区全域に堆積する。この層まで近世の遺物を含む。

第Ⅲ層：褐色土(10YR4/4)。灰白色火山灰ブロックを含む。調査区北側に堆積する。

第Ⅳ層：灰黄褐色土(10YR4/2)。この上面で検出した土壙の埋土に灰白色火山灰が堆積。C区のみで確認

第Va層：褐色土(10YR4/4)。B区南半部のみに分布。

第Vb層：暗褐色土(10YR3/4)。調査区ほぼ全域に分布する層である。

第Ⅵ層：暗褐色土(10YR3/4)。やや粘性あり。調査区南側に堆積する層である。

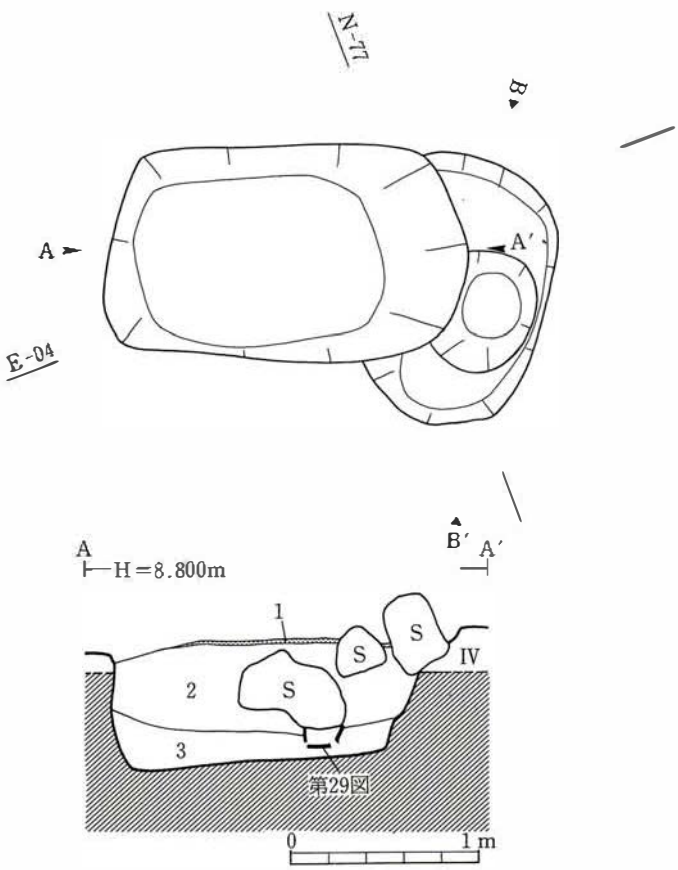
第Ⅶ層：褐色土(10YR4/6)。地山粒を多量に含む。調査区ほぼ全域に分布する。

第Ⅷ層：褐色土(10YR4/4)。調査区中央部から南側にかけて確認できた層である。

第Ⅸ層：地山（岩盤）

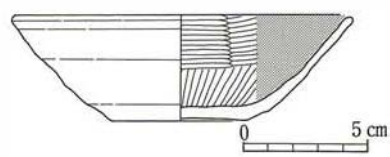
② SK98土壙

調査区南側の第Ⅳ層上面で発見した土壙である。平面形は長方形で、規模は長辺90cm、短辺60cm、深さ30cmである。埋土は3層に区分され、1層は薄い灰白色火山灰層、2・3層は褐色土が主体である。2層には大小8個の石が含まれており、その内の一つは凝灰岩で火を受けて内部まで赤色に変化している。他のものはわずかに火を受けた様子が窺える。遺物は、2層と3層の間から土師器杯が1個体出土した(第29図)。



No	土 色	土 性	備 考
1	灰白色 (10YR8/1)	灰白色火山灰	
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物、地山粒、火山灰ブロックを含む。
3	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒を含む。

第28図 SK98平面図・断面図



種 類	層 位	特 徴	口 径	底 径	器 高	登録番号
土師器杯	1-2	【外面】体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り無調整 【内面】ミガキ後黒色処理	13.4	5.4	4.2	R－1

第29図 SK98出土遺物

③　ＳＤ99溝跡

調査区南側第III層上面で発見した東西溝跡である。調査区外に延びており、確認できた長さは2.2mである。方向は、西で約７度北に偏している。上幅1.2m以上、下幅40cm、深さ30cmである。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土していない。

④　ＳＤ100溝跡

調査区南側第III層上面で発見した東西溝跡である。調査区外に延びているため、確認できた長さは1.3mである。方向は、西で約10度北に偏している。規模は、上幅60cm、下幅20cmである。埋土は地山ブロックを含む黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。

⑤　ＳＸ101柱穴

調査区南側で発見した柱穴である。第IV層上面で検出した。ＳＫ98と重複し、これより古い。規模は、一辺40～50cm、深さ16cm、柱痕跡は径30cmの円形である。掘り方埋土は褐色土で地山粒を含み、柱痕跡は黒褐色土である。遺物は出土していない。

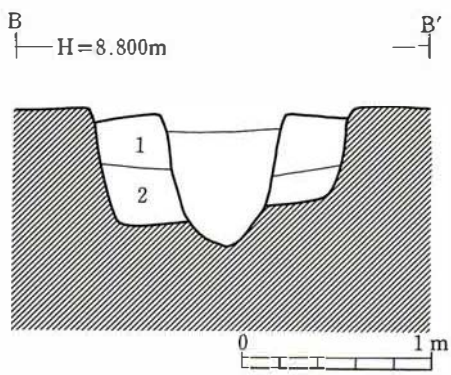
⑥　堆積層出土の遺物

Ｂ区第Ｉ層からは、近・現代の陶磁器が多く出土している。染付磁器の飯茶碗・皿・猪口が多く、底部に「太明成化年製」と銘款のある肥前産有田様式の角形大皿もある（図版13－４）。古代のものとしては赤焼き土器小型杯が出土している。内外面暗褐色で胎土に砂粒、ガラスが含まれている。第II層からはかわらけが出土している（第32図２）。ロクロ調整で内外面、胎土とも黒色である。また口縁部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。

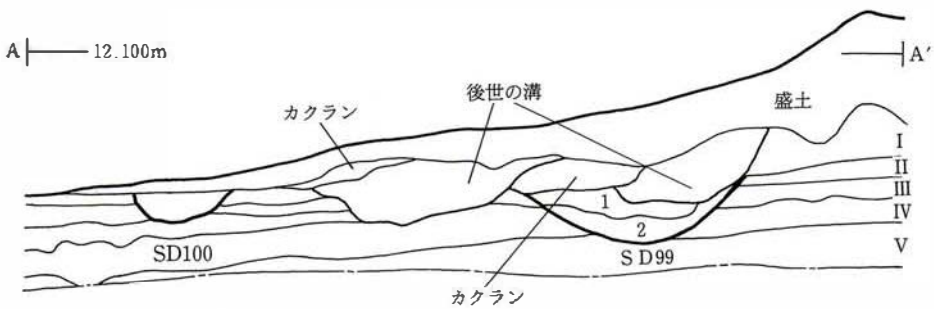
Ｃ区第Ｉ層からは近世・近代の陶磁器やかわらけ、古代の土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦などが出土している。第II・III層からは近世のかわらけ、古代の土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕、赤焼き土器杯や砥石、第IV～VI層では土師器杯・甕、須恵器杯・瓶が出土している。しかし、いずれの層の遺物も破片である。

(3)　Ｄ　区

近年の盛土下に厚さ10～50cmの表土があり、その下層は地山（岩盤）となっている。表土から土師器や油煙が付着した灯明皿等の小片が数点出土したのみで遺構は発見できなかった。



第30図　SX101断面図

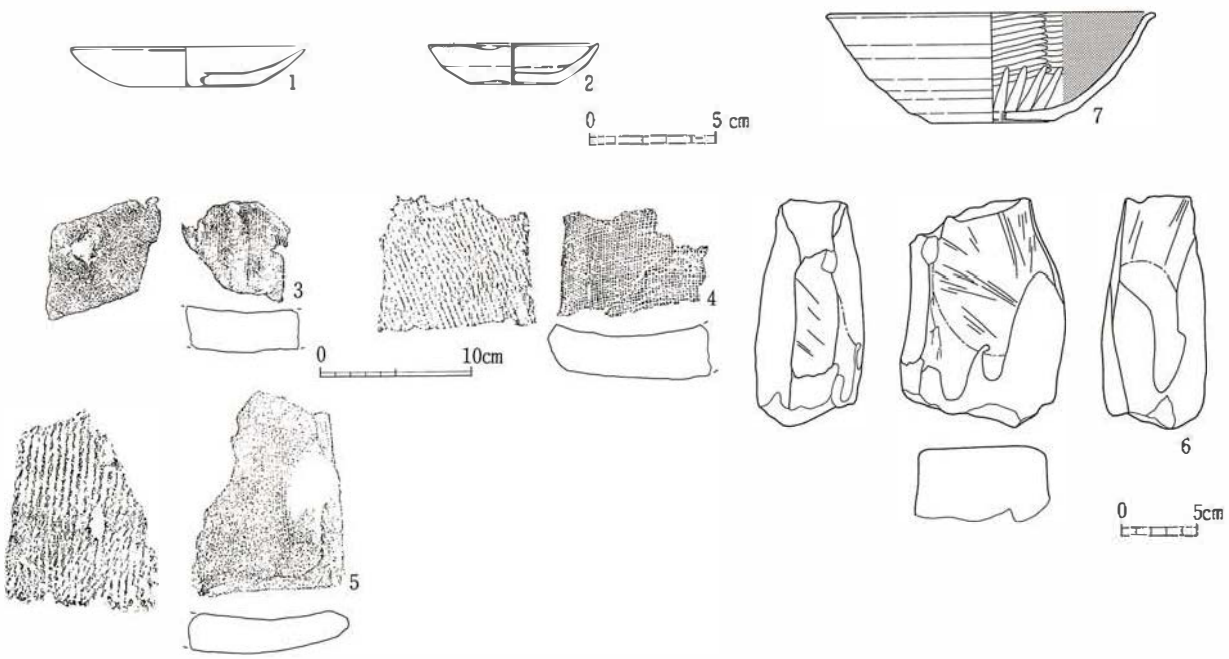


第31図　Ｃ区東壁断面図

5. 遺構の年代と分布

第３次調査では、南北に長い調査区のため、遺構の広がりを平面的に把握することはできなかった。ここではＡ・Ｃ区から発見した遺構について簡単に説明する。

1. Ａ区では調査区の南端部の第III層上面で溝１条、地山上で溝３条などを検出した。このうち第III層上で検出したＳＤ94溝跡は、埋土の２層から赤焼き土器杯が出土している。埋土２層は、その堆積状況から溝本体が埋没した後のくぼみに堆積した層と見られる。従って赤焼き土器杯はＳＤ94の下限年代を示す資料と考えることができ、その年代観によればおおよそ10世紀前葉頃とすることができる。他の遺構については出土遺物がないため年代は不明である。
2. Ｃ区では第III層上面で溝２条、第IV層上面で土壙１基を検出した。ＳＫ98は、埋土が10世紀前葉に降下したとされる灰白色火山灰の自然堆積層で覆われており、10世紀前葉を下限とすることが明らかである。また、埋土２層と３層の間から回転糸切り無調整の土師器杯が出土している。土師器杯はほぼ完形



番号	種　類	層　位	特　　徴	口　径	底　径	器　高	登録番号
1	かわらけ	L-I	【外面】体部：ロクロナデ(磨滅) 底部：回転糸切り無調整 【内面】ロクロナデ	(9.2)	(4.8)	(1.6)	R－5
2	かわらけ	L-II	【外面】体部：ロクロナデ、付着物 底部：回転糸切り無調整 【内面】ロクロナデ、付着物	(6.8)	(3.5)	(1.6)	R－4
3	平　瓦	L-1	一枚作り、IIC類。胎土砂粒含む。灰色				R－18
4	平　瓦	L-I	一枚作り、IIC類。胎土砂粒含む。黒褐色				R－19
5	平　瓦	L-I	桶巻作り、ＩＡ-ａ類。胎土砂粒含む。灰色				R－20
6	砥　石	L-II	長さ14cm、幅10.1cm、厚さ5.5cm、材質：砂岩 砥面は３面				R－9
7	土師器杯	L-II	【外面】体部：ロクロナデ 底部：回転糸切り無調整 【内面】ミガキ後黒色処理	(12.8)	(4.9)	(4.3)	R－2

第32図　Ｂ区堆積層出土遺物

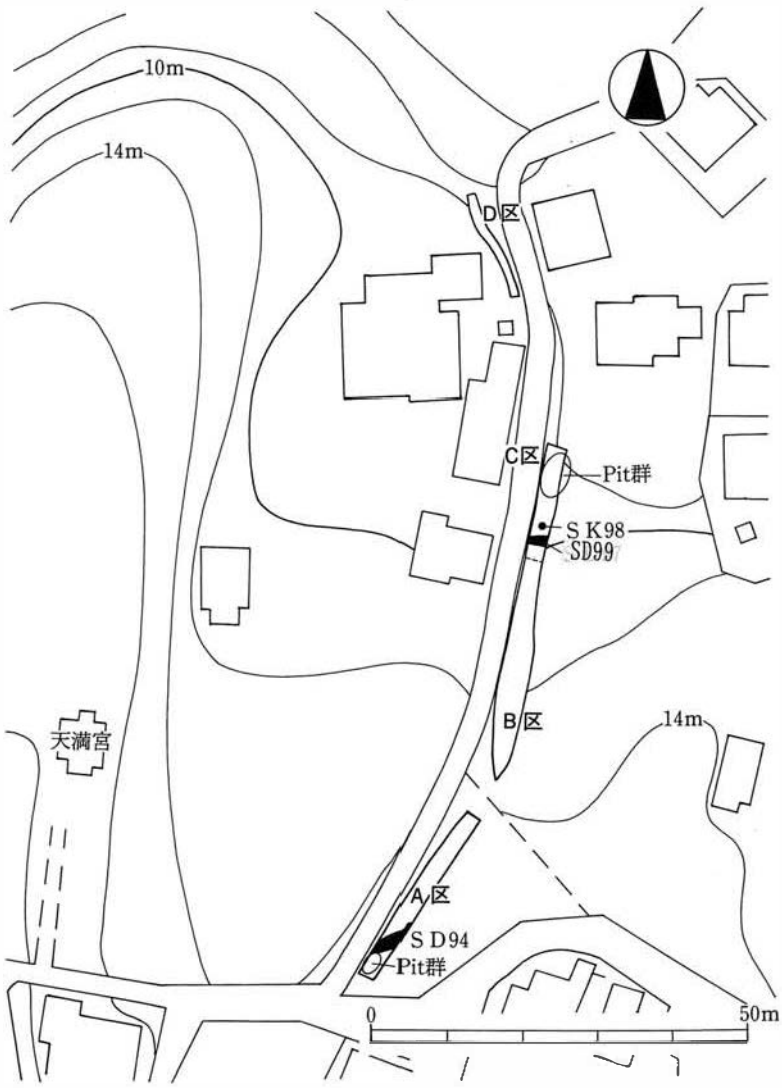
であり本遺構の年代に近いものと考えることができる。これらのことから、ＳＫ98はおおよそ10世紀前葉頃の遺構と推定される。ＳＤ99･100溝跡については遺物は出土していないが、層位的にみて10世紀前葉以降の年代が与えられる。

3. 今回の調査では、分布状況は希薄であるが古代の遺構を発見した。調査区周辺の畑にも古代の遺物が散布していることから、本調査区周辺には古代の遺構が少なからず存在している可能性が高くなった。

6. まとめ

(1) 丘陵北斜面において、古代およびそれ以降の溝６条、土壙１基、柱穴などを発見した。

(2) ＳＤ94・ＳＫ98の年代は、おおよそ10世紀前葉頃である。



第33図　遺構分布図

IV 考　　察

本遺跡は、館跡としての内容をもつ範囲を高崎遺跡の中から分離したものである(「II　2.　調査に至る経緯」)。しかし、それらの全体的な構造についてはこれまでほとんど触れるところがなかった。本遺跡においては、旧地形を残すと見られる部分が多く残っており、土塁状の高まりや人工的な傾斜面などを各地点で確認することができる。以下、それらを抽出し、留ケ谷遺跡における館跡の様子について簡単にふれてみたい。

No.1 地区（第1次調査区）

南北方向にのびる土塁・溝が発見されている。それらは北側に傾斜する尾根上に土塁・溝が構築されたもので、ＳＸ01は2時期、ＳＸ02は3時期の重複が確認されている。いずれもおおよそ同位置で重複していることから一貫してその位置が区画の対象とされていたことが知られる。この調査区の西側は緩やかな谷をはさんで天満宮のある平場へと続いている。東側の宅地との境界は急斜面となっているが、周辺の地形から推定すると、本来緩斜面が続いていた可能性がある。また、南側は約30mで丘陵頂部に至り、その南側は大部分が急斜面となっている。

No.2 地区（第2次調査区）

西側の上段平場（平場1）とその東側の下段平場（平場2）の二つの平場を確認した。上段平場は、北側へ細長く舌状に張り出した地形を利用したもので、その南西隅には土塁の一部が確認されている。また、この平場の東側は急斜面となっており、その裾部に溝が巡っていることから人工的に削り出している可能性が高い。下段平場は北側が緩やかな傾斜面であり、かつては裾部に東西方向にのびる土塁状の高まりが存在した[24](A)。東側には通路と見られる空堀状の落ち込みと土塁状の高まりが認られる(B)。両平場とも南側はNo.3地区の北辺の土塁で区画されており、その内側には溝が巡らされている。

No.3 地区（第1・2次調査区の間の地区）

第3次調査におけるＡ・Ｂ区の東側にあたる。北辺・南辺・西辺に土塁を巡らした方形の平場がある（平場3）。平場の面積は、土塁の内側で計測すると東西35～45m、南北45～55mである。北辺の土塁にはNo.2地区上段平場南西隅の土塁が連結しており、その西側には切り通しの通路がある(C)。また、その西側には鉤形に屈曲した土塁があり枡形とみられる(D)。その外側は比較的急斜面となっており、裾部と土塁頂部との比高差は約3mである。西辺の土塁は現状ではわずかの高まりとなって観察されるのみである。その高まりは幅約10mであり、第1次調査区のＳＸ02・03等のほぼ延長線上に位置している。No.1地区の北端部が現在の道路によって分断されていることを考慮するならば、これらは本来連続していた可能性がある。南辺の土塁は、幅5～9mであり、西辺の土塁から東へ約20mにわたって確認できる。この土塁の上には幅2～3mの高まりが東西約60mにわたって続いているが、No.1地区で発見した土塁と本地区西辺の土塁との関係を考慮するならば後世のものである可能性が高い。東辺は約1.5mの段差があって狭い通路がある(E)。その東側は急斜面となっており、No.4地区に続いている。通路との比高差は約8mである。

No.4 地区

No.3地区の東側の一段低い部分についても、西側と南側とは急斜面となっており、平面的にはおおよそ

---

[24] 昭和59年11月の分布調査で確認している。第2次調査前に壊滅。

第34図　留ケ谷遺跡とその周辺

方形であるところから人工的に造成された平場と考えられる(平場4)。この平場の北側の一段高い位置にも東西約20m、南北約25mの小規模な平場(平場5)が見られる。

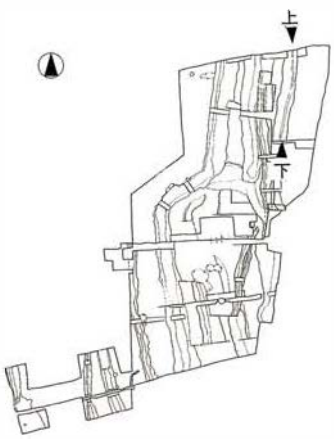
以上のように、本遺跡には現在確認できるだけでも五つの平場が確認できる。平場5のように明確な区画施設を持たない平場はさらに周辺に存在する可能性がある。No.1地区で発見した土塁と溝については調査区の南側ではその痕跡が認められず、どのようにのびるものかは不明である。しかし、平場1～5との位置関係から館の西辺を区画する施設である可能性が大きいと考えられる。

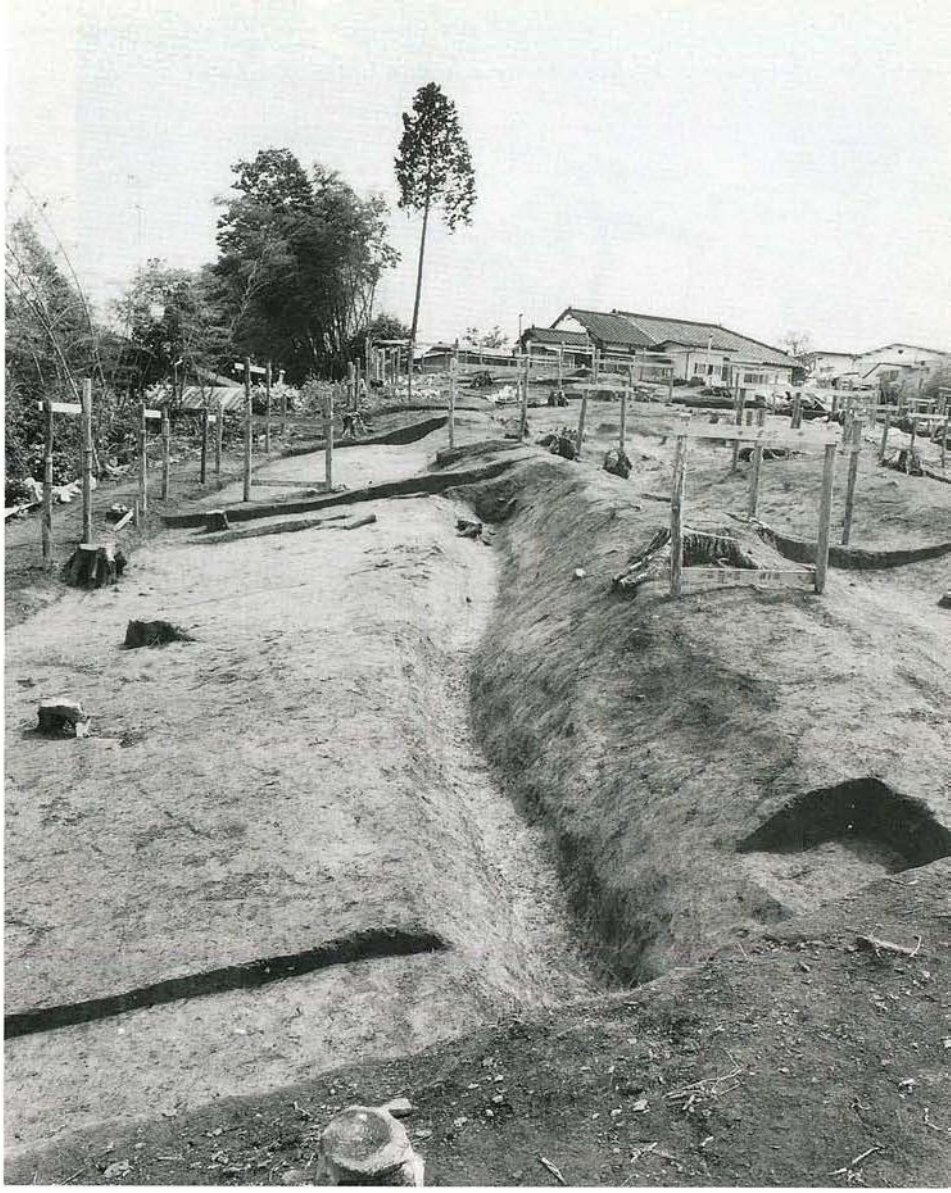
写 真 図 版

図版 1
上：調査区航空写真（昭和36年撮影）
下：同　上（平成5年撮影）
●印上が第3次調査区、下が第1次調査区

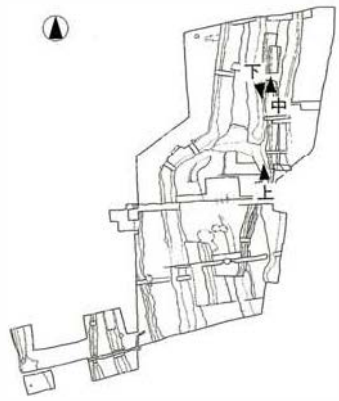
この空中写真は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものです。
（承認番号 平10東複第164号）

図版2　第1次調査　　上：調査区全景（北より）　　下：調査区全景（南より）

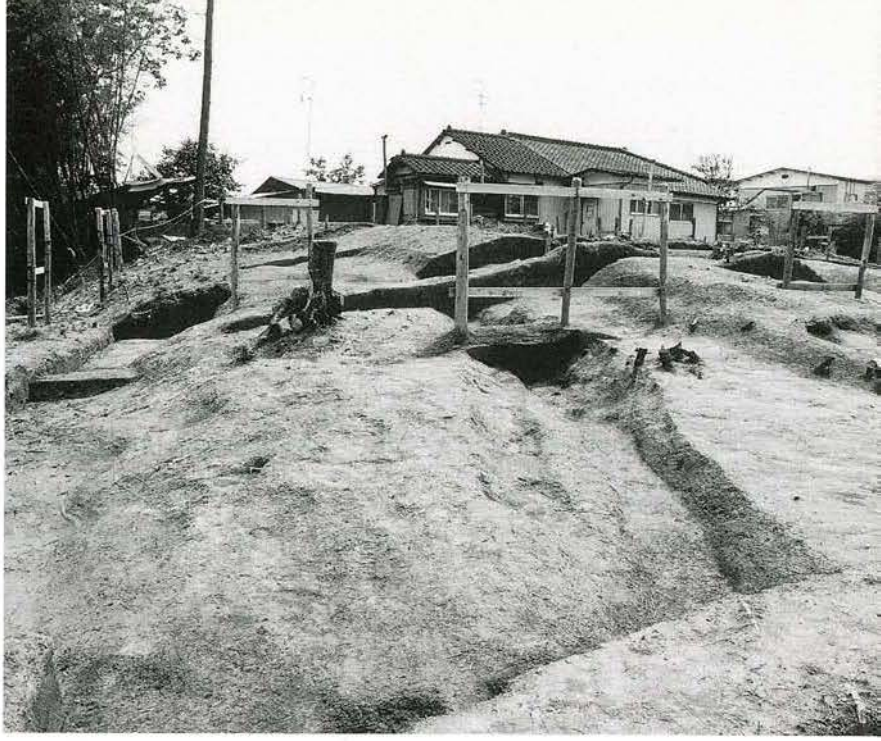


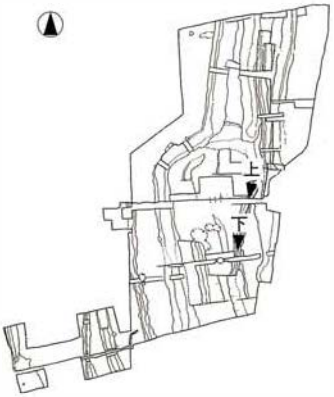


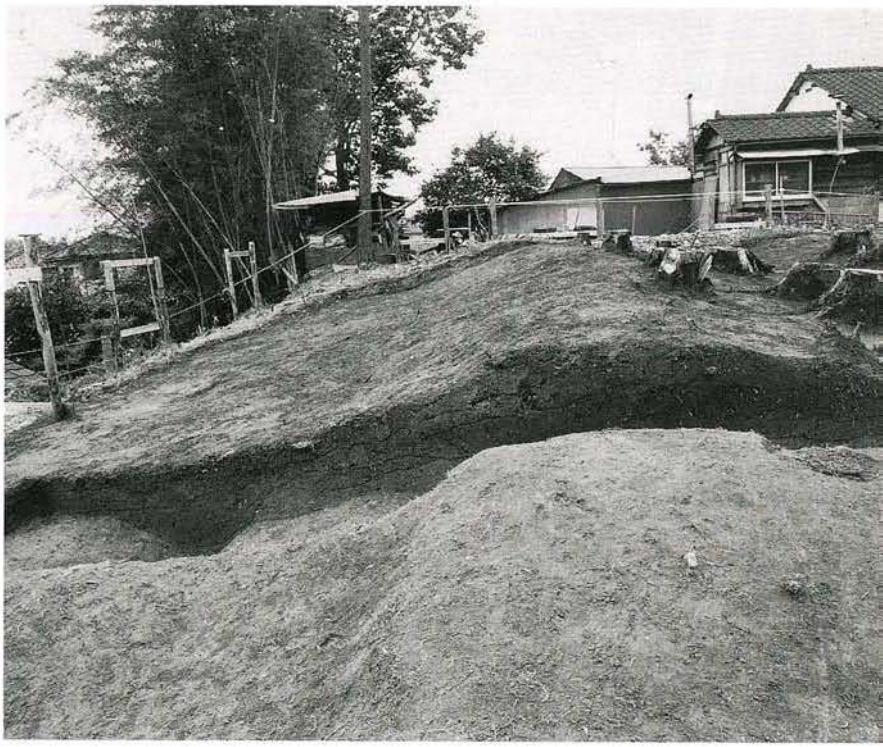
図版3　第1次調査
上：SD05（北より）
下：同上（南より）

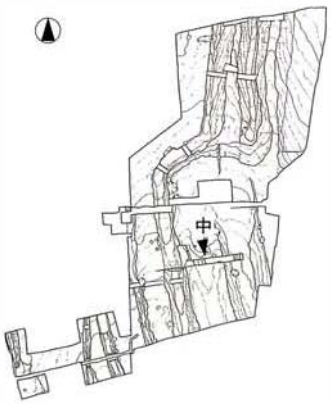


図版4　第1次調査
上：SX02, SD07（南より）
中：SX02A・B, SD07A・B（南より）
下：SX02B, SD07B（北より）

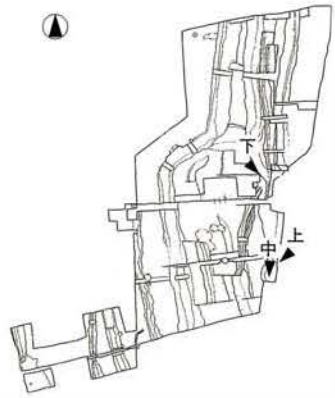


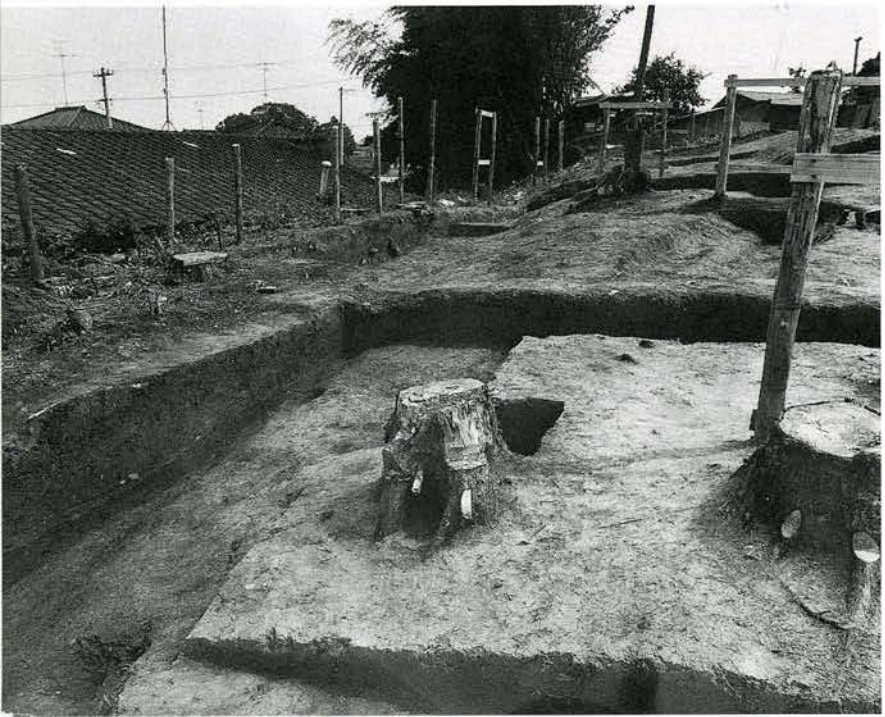




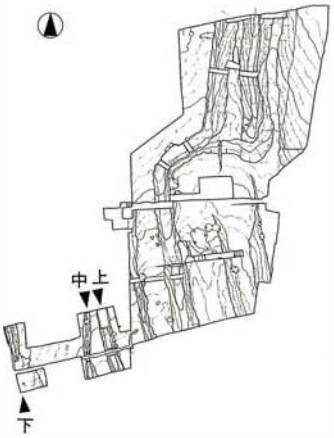


図版5　第1次調査
上：SD04，SD16（北より）
中：SX01，SD04（北より）
下：SD04土層堆積状況（北より）

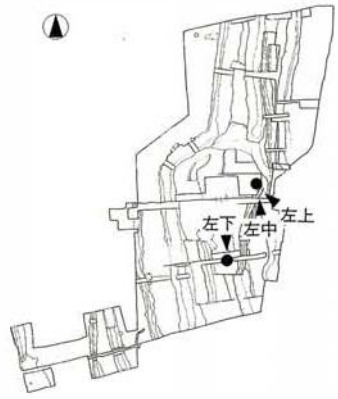




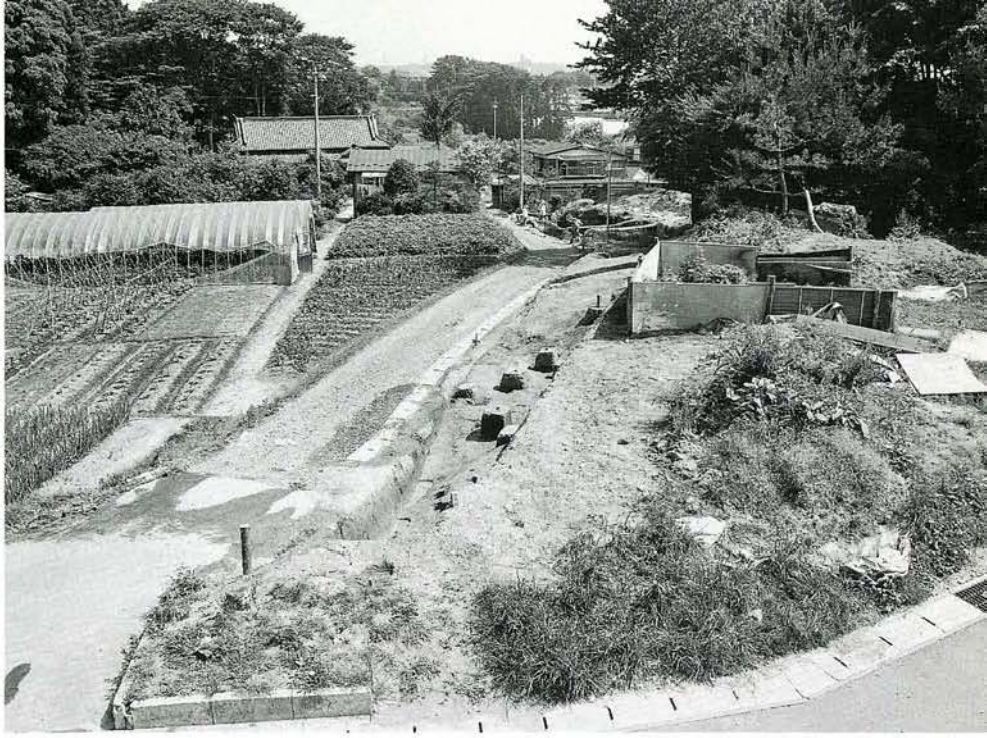
図版6　第1次調査
上：SX20A（北東より）
中：同上土層堆積状況
下：SX06の下層の状況（北西より）



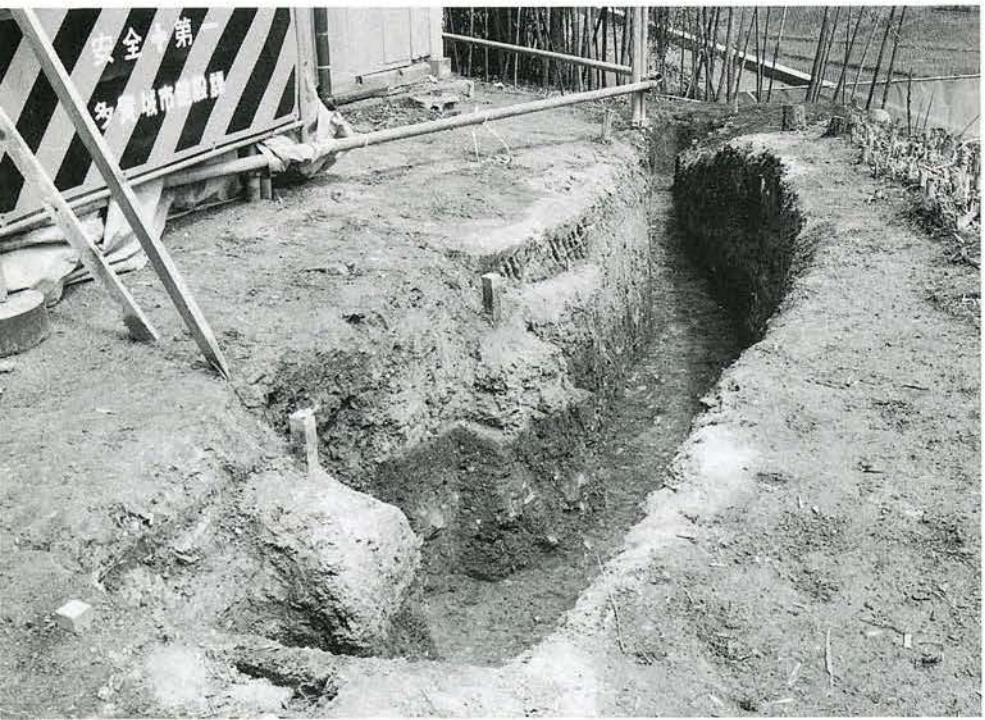
図版7　第1次調査
上：SD10（北より）
中：SD11（北より）
下：SD13（南より）



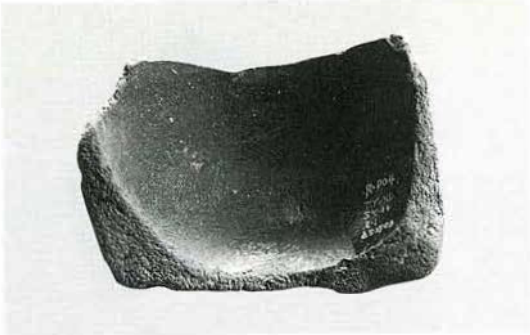
図版8　第1次調査
左上：SX14（南東より）
左中：同上（南より）
右上：SX14壁面の状況（北より）
右下：SX14土層堆積状況（南より）
左下：SX15（北より）

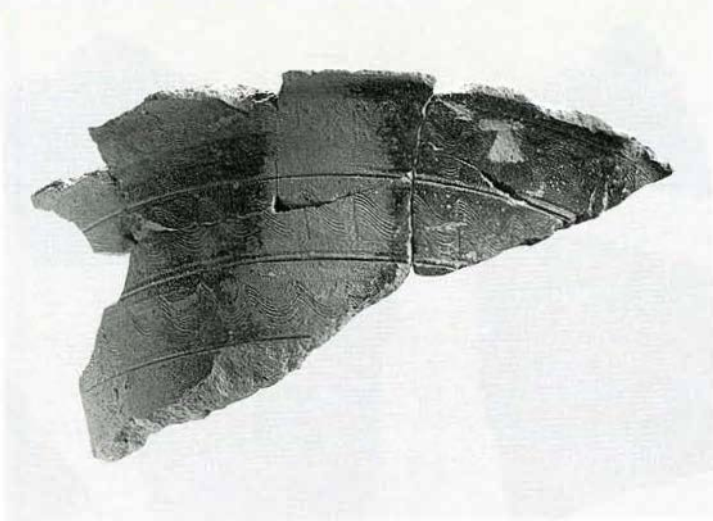


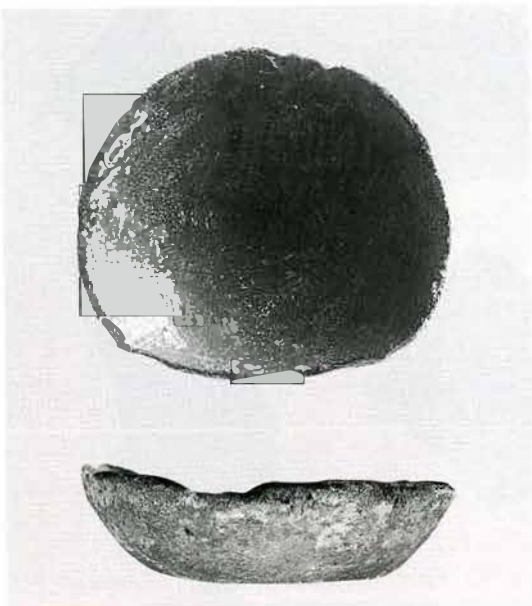
図版9　第３次調査
上：調査区全景（南より）
中：A区全景（南より）
下：B区全景（北より）

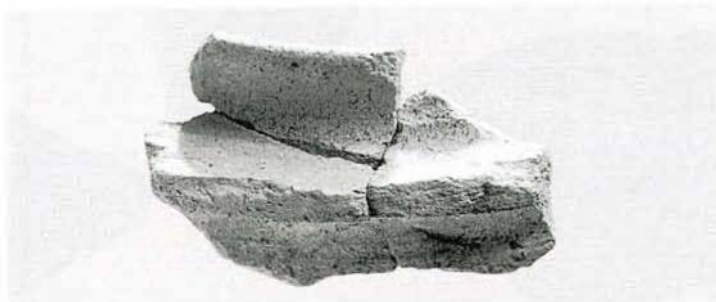


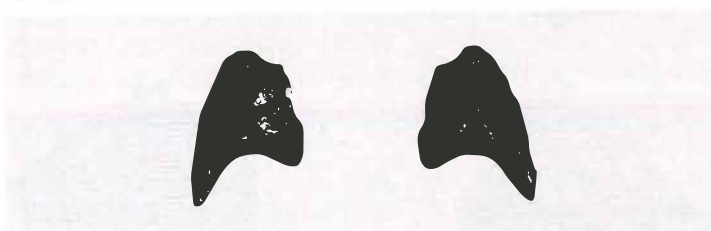
図版10　第３次調査
上：C区全景（南より）
中：SK96土壙断ち割り（西より）
下：D区全景（南より）

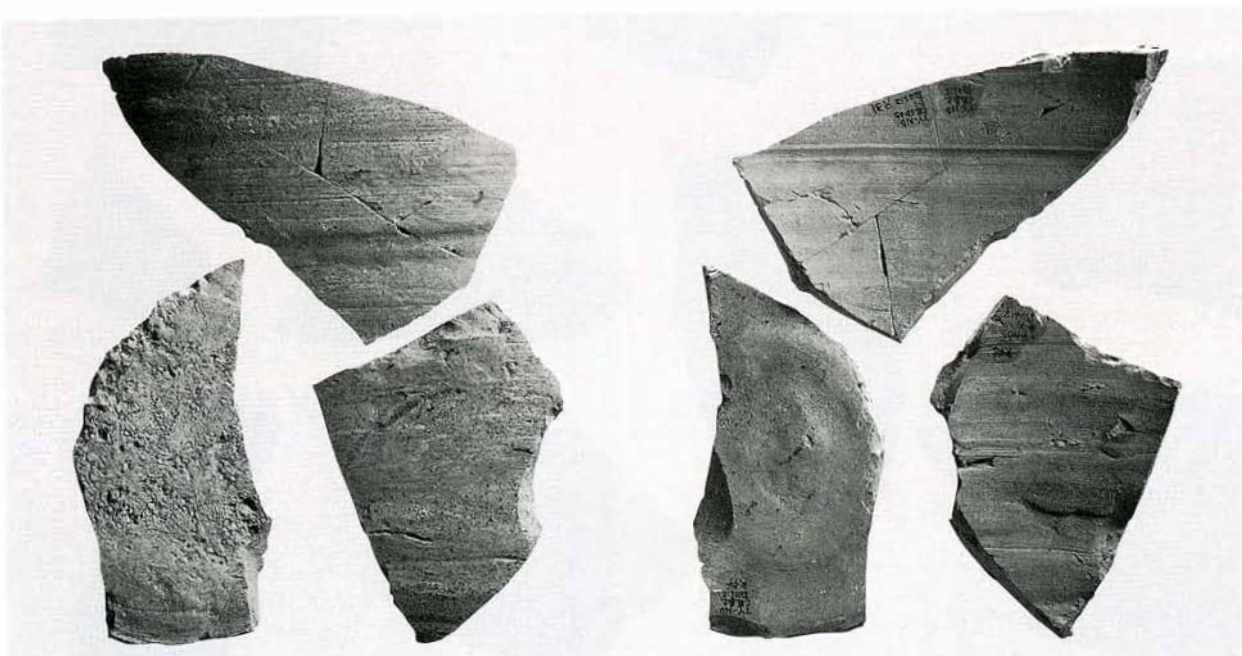










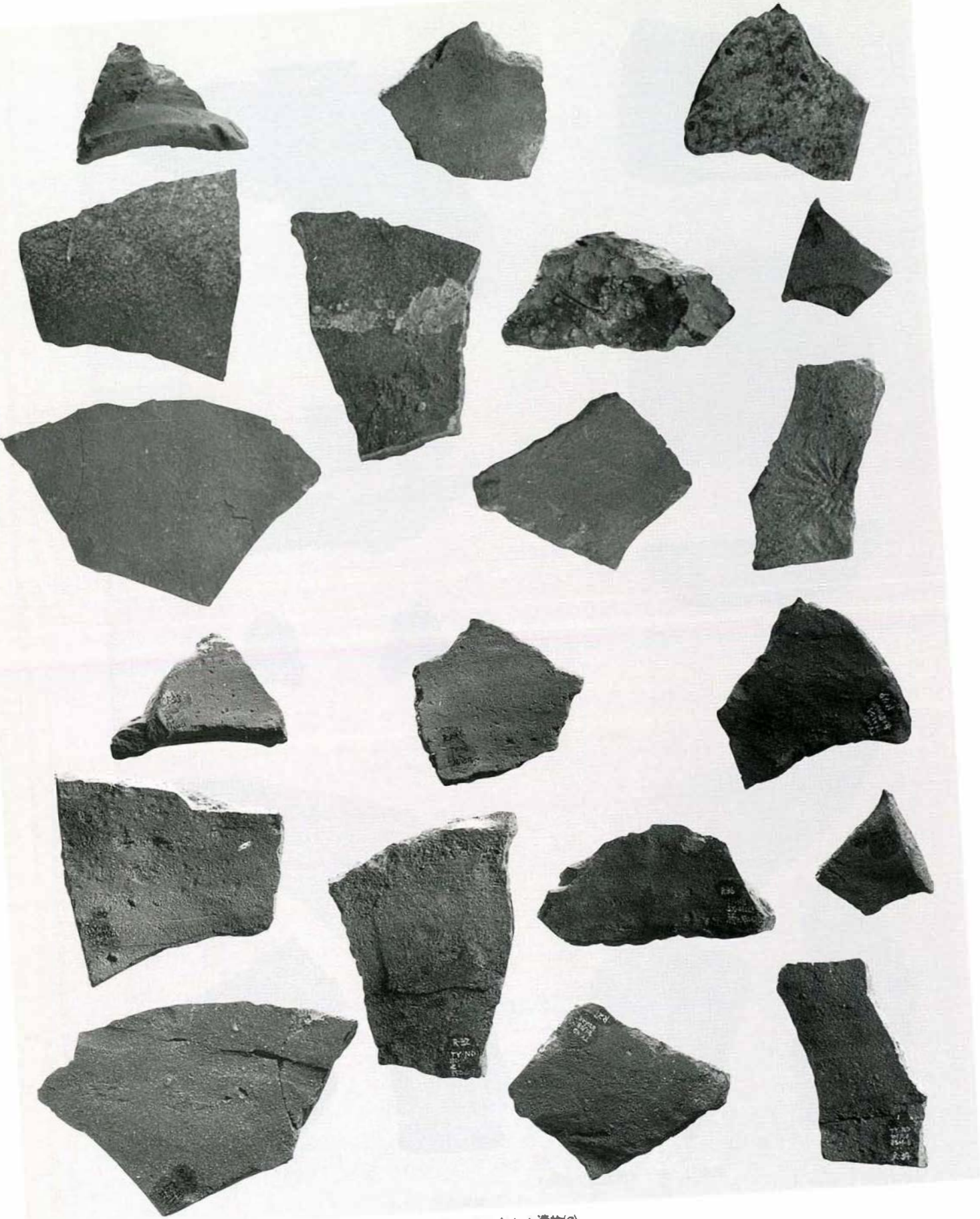


1	2
3	4
	5
6 7 8	6 7 8

図版11　第1次調査出土遺物(1)

1	土師器杯	R-4	6	灰釉陶器瓶	R-31
2	須恵器甕	R-2	7	同　上	R-44
3	かわらけ	R-3	8	同　上	R-46
4	土師器羽釜	R-42			
5	石鏃	R-63			

(1・4・5　S＝1/1　2　S＝1/3　3　S＝2/3　6・7・8　S＝1/2)



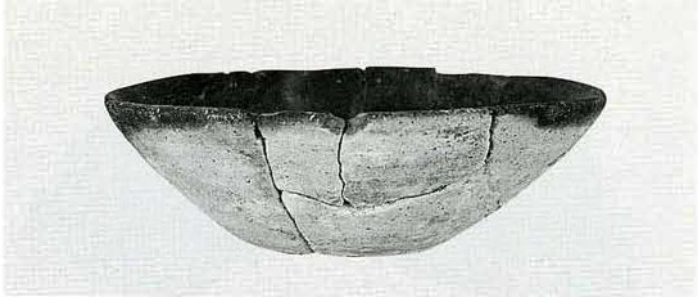
図版12　第１次調査出土遺物(2)

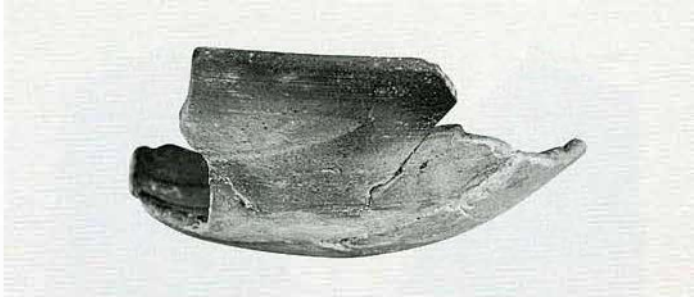
1	無釉陶器擂鉢	R-55
2	同　上	R-23
3	無釉陶器壺	R-49
4	同　上	R-30
5	同　上	R-32
6	無釉陶器壺	R-36
7	同　上	R-35
8	同　上	R-29
9	同　上	R-27
10	同　上	R-34

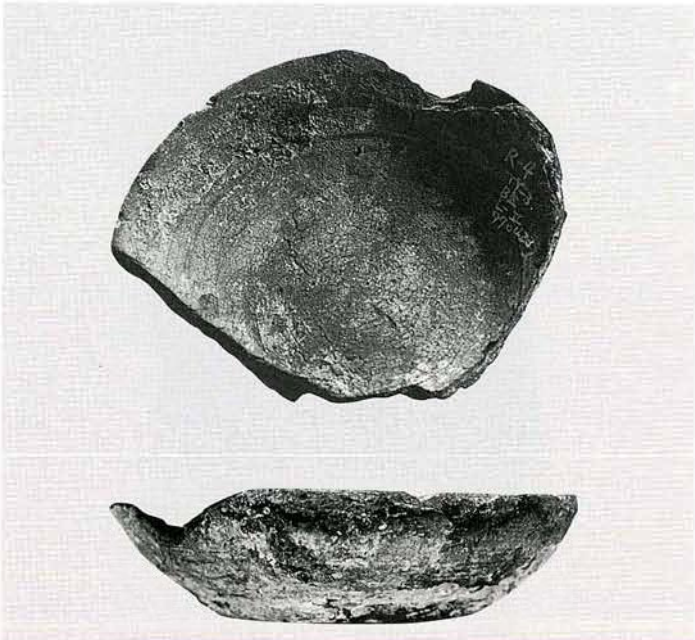
(S＝½)

1	2	3
4	5 6	7
8	9	10

1	2	3
4	5 6	7
8	9	10





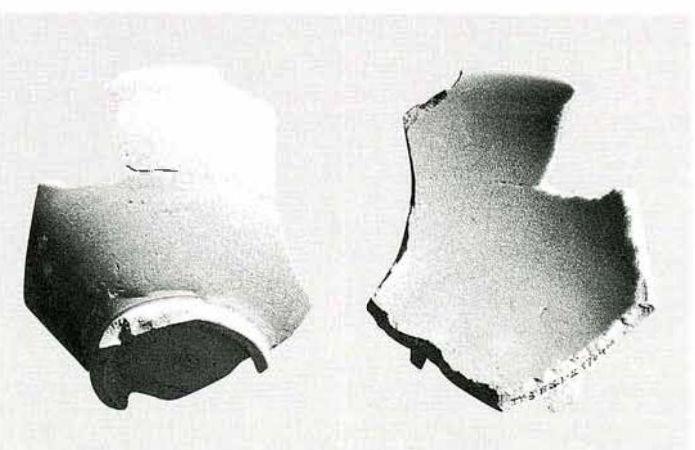


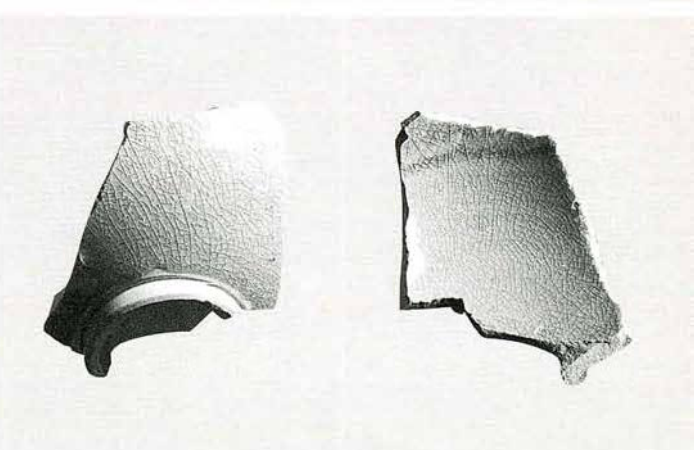
1	2
3	
4	
5	6

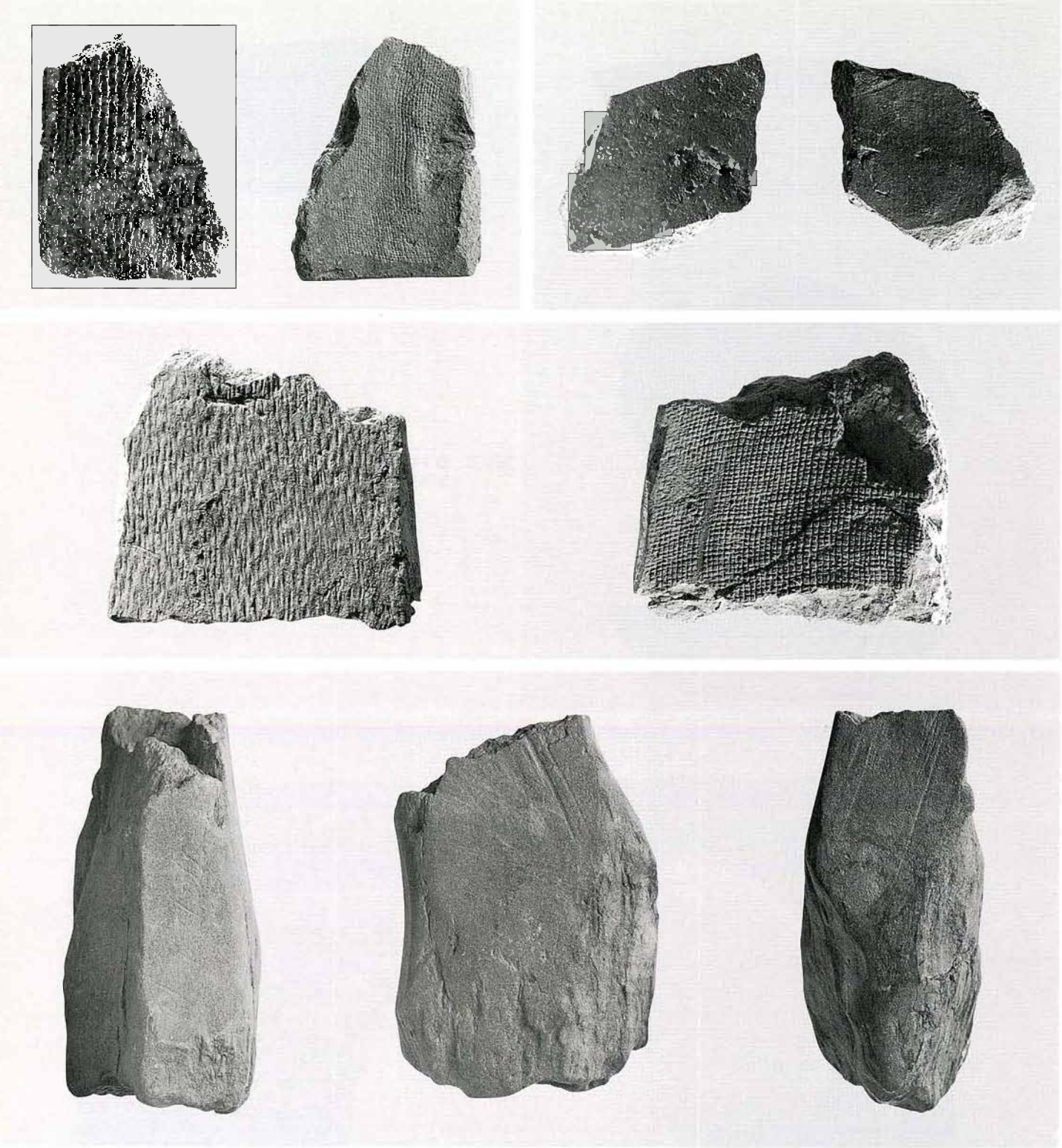
図版13　第3次調査出土遺物(1)

1	土師器杯	R-1	4	染付磁器角皿	R-8
2	同　上	R-2	5	施釉陶器碗	R-21
3	かわらけ	R-4	6	同　上	R-22

（1・5・6　S＝½　2・4　S＝⅓　3　S＝¼）







図版14　第３次調査出土遺物(2)

1　平瓦　R-19
2　同上　R-20
3　同上　R-18
4　砥石　R-9
（1　S＝⅓　2・3・4　S＝½）

1	2
3	
4	

報告書抄録

ふりがな	とめがや
書名	留ケ谷遺跡
副書名	第1・3次調査
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第48集
編著者名	千葉孝弥・高橋圭蔵・三浦幸子・草田　敦・山川純一
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27－1　(Tel)022－368－0134
発行年月日	西暦1998年3月25日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
留ケ谷遺跡（第1次）	多賀城市留ケ谷1丁目地内	18	048	38度17分53秒	141度00分30秒	19850424～19850703	1,300	宅地造成
留ケ谷遺跡（第3次）	多賀城市留ケ谷1丁目地内	18	048	38度17分55秒	141度00分30秒	19970411～19970626	200	道路拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
留ケ谷遺跡（第1次）	城館	中　世	土壁、溝、土塙	無釉陶器	
留ケ谷遺跡（第3次）	集落	平安時代	土塙、溝		

多賀城市文化財調査報告書第48集

留ケ谷遺跡

―第1・3次調査報告書―

平成10年3月25日　発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話（022）368－0134

発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話（022）368－1141

印刷　今野印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町4－5
電話　（022）288－6123